

第二四章

聖ラーマクリシュナとナレンドラ

聖ラーマクリシュナとナレンドラ（スワミ・ヴィヴェーカーナンダ）

アメリカとヨーロッパでのヴィヴェーカーナンダ

一八八五年アシヤル月の最終日、山車祭ラタ・ヤートラの翌日である（西暦一八八五年七月十五日水曜日）。今朝、シュリー・シュリー！バガヴァン・シュリー大聖至聖なる聖ラーマクリシュナはバララムの家に坐つて、ナレンドラ（スワミ・ヴィヴェーカーナンダ）の素晴らしい性質を信者たちに語つておられる。

〔ナレンドラの素晴らしい性質——人々の中の王子〕

〔ナレンドラはとても高いクラス靈階だ。——無形の神の領域にいる。男のなかの男だ。こんなに大勢信者たちが来ていても、あれほどの人物はほかにいない〕

「ときどき、わたしは坐つていて信者たちを調べてみるんだよ。蓮でいえば十枚花びらの人たちもあるし、十六枚の人もあるし、百枚の人もある。——そういうなかで、ナレンドラは千弁の蓮だよ！」

〔ほかの人たちは、水差しかせいぜい水壺だ。——ところが、ナレンドラは大桶だ〕

〔ほかの人たちがその辺にちよいちよいある小さな水溜まりだとすると、ナレンドラはハルダル池の

ような大野水池だ」

「魚なら、ナレンドラは目の赤い大鯉だ。ほかの人たちはいろんな魚——ヤナギバエとか、ワカサギとか、イワシとか——」

「大きな、大きな容れものだ——たくさん物が入る。大きな洞の大竹だ」

「ナレンドラは何にも支配されない。世俗のものに執着もないし、感覺的なよろこびにも支配されない。オス鳩みたいだよ。オス鳩はクチバシをつかむとふり放して囓みつく。——メス鳩ならジツとして黙ってるよ」

〔まず神を覚さること——命令を受ければ教えを説くこともある〕

三年前の一八八二年、ナレンドラはブラフマ協会の友人、二、三人と連れ立って、南神村トウキョーシヨルのカーリー寺院に聖ラーマクリシュナをお訪ねした。そして一晩泊まった。夜が明けると、「五聖樹パンチャパテイの杜へ行って瞑想をしてごらんよ」とタクルルがおっしゃった。しばらくした後でいらしたタクルルは、ナレンドラと友人たちが五聖樹パンチャパテイの杜の樹下で瞑想しているのをご覧になった。瞑想が終わるとタクルルがおっしゃった。「人生の目的は神を体得つかむことだ。ひと気のない場所ですっきりと瞑想して、神を思っ

て恋い焦がれて、『神さま、どうか会って下さい。私にお姿を見せて下さい』と言って、泣いて祈るんだよ」

ブラフマ協会などの宗教団体が手がける女性の教育、学校建設、講演などの慈善事業に関しては、

次のようにおっしゃった。「まず神を、有形、無形の神を覚さとることだ。言葉と心を超えたあの御方が、信者のために姿をお取りになる。現れて話して下さるのだよ。人道的な仕事というものはね、あの御方に直接お会いして、そして命令を受けてから始めるんだよ。歌にもあるだろう——『お寺に神像も祀まつられていない。なのに献灯アールテイをしているかのようにポドはホラ貝を吹く』とね。それでポドは叱ちられるんだ。

お堂に神さまも祀まつっていない！

バカのふくホラ貝なんか、やかましいぞ！

十一匹のコウモリだけでたくさんだ——

もしも、自分の胸の宮に神像(クリシユナ)を祀ろうと思ったり、もし至聖なるものを掴もうと思ふのなら、ただボウ、ボウとホラ貝を吹いてばかりいてもどうにもならんよ！ 先ず、心の掃除をしなけりやね。心がキレイになつたら、至聖清浄の御方が入つていらつしゃつてお坐り下さる。コウモリのフンも片付けないのであつては、祭神をお招きすることはできないよ。十一匹のコウモリというのは十一の器官のことだ——つまり五つの感覚器官(目耳鼻舌皮膚ひわ)と五つの行動器官(口手足肛門生殖器)と心だよ」

「先ず最初に深く沈むことだ。沈んでいって宝玉たまを取つて、そうしてから他の仕事をする事だ。先ず第一に祭神をしつかり据すえて、それから、望みとあれば講演でもしたらいい！」

「ところが、沈もうとする人は滅多にいない。修行もせず、祈りもせず、識別も離欲も実行しないで、

二つ三つ何か覚えるとききに講演だ！」

「人を教え導くということは、難しいことなんだよ。至聖なるものを覚った後で、もしその御方の指図があれば、はじめて人を導くことができるようになる」

一八八四年の山車祭の日、学者シヤシヤダルはカルカッタで聖ラーマクリシュナにお会いした。そこにはナレンドラも居合わせた。聖ラーマクリシュナはシヤシヤダルにおっしゃった。「あんたは人々のために思って講義レクチャーをしている。それはいいことだ。でも、神の命令で話すのでなけりゃ、どんなにいろいろ偉ウエそうなることをしゃべったって、二日ほどは人も聞くかもしれないが、すぐ忘れてしまうものさ。郷里クニにハルダル池という名の池があつてね、池の端を便所代わりにする連中がいた。村人がどんなに怒鳴つても効き目がない。とうとう役人がやってきて立て札を立ててくれた。そうしたらピタリと止まった。それと同じで、神の命令を受けなくては人の指導はできないのさ」

師ズルの指示を受けたナレンドラが世を捨てて密かに独居し、苦行を行ったのは、そのためだった。聖ラーマクリシュナの御力で超人になつた後に人々に教えを説く、という難行を果したのだった。

一八八六年、コシポールで病に伏せておられた聖ラーマクリシュナはある日、「ナレン、お前が皆に教えることになる」と紙切れに書かれた。

スワミ・ヴィヴェーカーナンダはアメリカから、マドラスに住む人々に手紙を送っている。そこには「聖ラーマクリシュナの僕しもべである私は、メッセンジヤーとなつて、タクルの教えを世界に宣布している」と記されている。

「最も取るに足らない師の僕である私が、師のメッセージをインド、そして世界中に伝えるという特権に浴することができたのは、皆さんの師への惜しみない感謝の気持ちによるものです。遠からぬ将来、怒涛のごとくインドに打ち寄せる定めにある霊的高波の最初のざわめきを、皆さんの天性の霊的資質が、師とその教えの中に見て取ったのです」（マドラス講演への返答）

「私の語った真理はすべて大覚者の言葉であり、真理でない言葉はすべて私の言葉である」と、スワミ・ヴィヴェーカーナンダはマドラスにおける三度目の講演で述べている。

「生涯私が語った真理の言葉はひとえに師の言葉のみであり、私が語った多くの真理ならぬこと、正しくないこと、人類の為にならないことはひとえに私の言葉、私の責任であることを伝えて、スピーチの終わりとさせて頂きます」（マドラスでの三度目の講演）

カルカッタのラーダーカーンタ邸で歓迎を受けた際のスワミ・ヴィヴェーカーナンダは、聖ラーマクリシュナの力が世界中に現れているとして、「おお、インドの人々よ、あの御方を思うならば、あらゆる分野での偉業を成し遂げることができるでしょう」と語っている。

「この国を復興させるには、かの御名の下に熱烈な思いで結集せねばなりません。ラーマクリシュナ大覚者の教えを説くのは、私であっても、皆さんであっても、また他の誰であっても構いません。しかし、私がああ御方を皆さんの前に差し出すなら、それを判断するのは皆さんなのです。我が民族のため、我が国家のために、人生のこの偉大なる理想とどのように関わっていくかを判断するのは皆さんなのです」

「師の没後十年で、その力は世界を包み込みました。私を通して師を判断なさらないように——。私は非力な道具に過ぎません。私や他の弟子たちが何百回生まれ変わろうとも、師の偉大さの百万分の一にも及ばないでしょう！」

師（グルデーヴァ）を語りながら、スワミ・ヴィヴェーカーナンダは完全に我を忘れた。幸いなるかな、グルへの愛と信仰に満たされし者！

ナレンドラによる聖ラーマクリシュナの教えの宣布

今日は、大覚者パラマハムサデーヴァ様が教えられた永遠普遍の教えサタータナヒन्दウー・グルマを宣布するにあたって、スワミ・ヴィヴェーカーナンダがどれほどの努力をされたかに触れたいと思う。

〔神の覚り〕

「先ず第一に神をつかむことだが、聖ラーマクリシュナの第一の教えだった。信仰とは宗教教義を暗記したり、聖句を引用したりすることではない。神の覚りは、渴仰の心で神を呼び求める信者が、今生か来世で得られるものだ。ある時タクルダツキヤシヨルが南神村のカーリー寺院でおっしゃったのを覚えてい

る。
大覚者はコシポールのマヒマーチャラン・チャクラバルティに話しておられた。（一八八四年十月

二十六日、日曜日）

聖ラーマクリシュナ「(マヒマーチャン他の信者に) 聖典をどれだけ読めばいいのかね? ただ議論しただけでどうなる? 先ず、あの御方をつかもうと努力することだ。本を読んだだけで何がわかる? 市場バザールに着かないうちは、遠くからワーワーというざわめきが聞こえるだけで。市場に着けば話は全く別だ。何でも見られるしはつきり聞こえる。「お芋をおくれ」「あいよ、じゃ銅貨おかねをおくれ」——何でもはつきり見聞きみきできるよ。

本を読んだだけじゃ正しい理解はできない。たいへんな違いだな。あの御方を見た後では、本もお経も、サイエンスとやらも、皆、薬ぐづクズのように感じるよ。

大旦那さまと話をすることが肝心かなめ要なんだ。大旦那に会いもしないで、あのかたには、お屋敷が何軒あるんだろう、どこどこに別荘があるんだろう、株券はどれだけ持っていなさるだろう、なんて一生懸命に考えていたって、いったい何になる? でも、何とかして大旦那と二度会いさえすれば、——たとえ塀をのりこえても、コッソリ裏口から忍び込もうと、とにかく何とかして会いさえすりゃ、家のこと、別荘のこと、株券のこと、何でも大旦那みずか自身が話して下さるさ。いちど大旦那と顔見知りになったら、そのあとは執事も門番もみなお前におじぎをするようになるよ」(一同笑う)

信者「さて問題は、どうして大旦那と話をすることができるようになるか、というところでございませう?」

聖ラーマクリシュナ「だから働カルマけ、修行サダナをしると言うのさ。神様は存在する、と口でだけ言って坐りこんでいたんじゃダメだよ。何とか工夫努力して、あの御方のそばまで行くことだ。静かなところ

で独りになって、一生懸命あの御方を呼べ、祈れ。会って下さいと言って夢中になって泣け！ お前たちは女と金のためなら狂ったように走りまわるくせに……。そんなら、あの御方のためにちよつとでも狂ってみる！ 神を求めて熱心のあまり、あの人は頭がオカしくなつたと言われてみる。何日か一人になって、世間のことをすべて忘れて、あの御方を呼んでみる。

口でただ、神はたしかに存在する。なんて言うだけで、怠けて坐りこんでいたらどうにもならんよ。ハルダル池には大きな魚がいる。だが、池の端はたに坐りこんでいるだけじゃ魚はとれないだろう？ エサの用意をして水に投げこめ。すると魚は深い水底から上がってくるから水が動く。何ともいえぬ嬉しさだ。魚の姿がチラツと見えて、次にドポーンと水しぶきを上げてとび出す。それを見たらどんなに嬉しいことか」
(原典註1)

スワミジは、シカゴの宗教会議でまったく同じことを、すなわち宗教の目的が神を覚さとること——見神であることを語った。

「ヒンドゥー教は、言葉や理論を糧かにしようとはしません。神を見ねばなりません。それなくして疑いが晴れることはありません。ですから、魂について、神について、インドの聖者が示す最高の証あかしは魂を見たということ、見神したということなのです。ヒンドゥー教体系において為される奮闘は、完璧になること、神聖になること、神に至り、見神することへの絶えざる奮闘なのです。そして神に至

(原典註1) 心の清い人たちはさいわいである、彼らは神を見るであろう。(マタイによる福音書5・8)

り、見神し、完璧になること、天にあられる父のごとく完璧になることをもってヒンドゥー教とするのです」(シカゴ宗教会議におけるヒンドゥー教に関する講演)

スワミジューはアメリカの多くの場所で講演し、どこにおいても同様に語った。ハートフォードでは次のように述べている。

「次に話したいのは、宗教とは教理や教義に基づくものではない、ということなのです。あらゆる宗教の行きつく先は、魂における神の実現にあります。理想や方法が異なっていようとも、これこそが要点です。これが神の実現であり、感覚世界、飲み食いして戯言たわごとを語るこの世界、虚偽と利己主義の世界の背後にあるものなのです。全ての書物、全ての信条、この世の虚栄を超えたところ、己おのれのうちに神の実現がなされます。世界中の教会の教えを信じようとも、経典のすべてを頭に載せて歩もうとも、地上のあらゆる川で洗礼を受けようとも、それでもなお神の理解がなされないのなら、最低の無神論者と見なしましょう」

スワミジューは著書『ラージャヤ・ヨーガ』のなかで、「今の人たちは、神を覚られることを信じていない」と記している。「賢者リッやキリストのような霊性の大聖者には真我の実現が可能だったかも知れないが、今ではそんなことはありません」と彼らは言う。しかしスワミジューは、「確かに真我の実現は可能だ」としている。「心の集中を訓練するなら、必ずやハートのうちに神を見出すであろう」と語っている。「偉大なる教師たちは皆、神を見たのです。自らの魂を見て、見たことを説いたのです。唯一の違いは、こうした宗教のほとんどが、殊ことに近代に入って、『覚さりの経験は、今日では不可能だ』とする特異な

主張をしているということです。こうした経験はごくわずかな人々、後世に名を残す数少ない宗教創設者へのみ可能なことだった、としているのです。今ではこうした経験は時代遅れだとして、それゆえ今や宗教を信じるしかない、としているのです。私はこれをきっぱりと否定します。一貫性が自然の揺るぎない法則であり、一度起こったことは常に起こりうるのです」(ラージャ・ヨーガ、序論)

一八九六年一月九日、ニューヨークでのスワミジューは、普通の宗教の理想に関する講演を行った。すなわち知識の道、信仰の道、行為の道を歩む者が一つになる宗教について語った。「あらゆる宗教の目的は神の実現にあること」を講演の結びとした。また「知識の道、信仰の道、行為の道という異なった道、異なった方法も、目的はただ一つ、神を覚えることにある」と述べたのである。

「さらにまた、こうした様々なヨーガの道(カルマ・ヨーガ、バクティ・ヨーガ、ラージャ・ヨーガ、ジュニヤーナ・ヨーガ)は、実践をもつてなされねばなりません。理論をもつてなすことはできません。その道を瞑想し、それが生活の全てとなるまで覚らねばなりません。宗教とは覚りであり、どんなに美しくとも、教義や理論を語ることでないのです。それは在ること、なることであって、聞いた、認めたりすることではありません。知的承認ではないのです。知的承認によって百もの愚行を犯し、また翌日には変えることもできませんが、この在ること、なることこそが宗教なのです」

マドラスの人々に宛てた手紙には、「ヒンドゥー教の特質は神を覚えることにある」と記されている。ヴェエダの第一の理想は、神を覚えることだ。この点において、ヒンドゥー教は他の宗教と一線を画している。

「ヒンドゥー教が世界中の他の宗教と考えを異にする点、聖者がサンスクリット語の言葉を尽くして表現する教えは、人は神を覚らねばならない」ということです。それゆえ二元論者が言うように、神、ブラフマンを覚ることが、また一元論者が言うようにブラフマンになることが、ヴェエダ全ての教えの目的なのです」（マドラス講演への返答）

一八九六年十月二十九日、スワミジはロンドンで講演をした。論題は、神を覚えることについてだった。この講義の中で、『カタ・ウパニシャッド』を読んだスワミジは、ナチケートスの話に触れている。ナチケートスは神を見たいと思っていた。ブラフマンの知識を得たいと思っていた。ダルマラージャ（死の王ヤマ）は言った。「神を知りたいのなら、執着と快楽への欲望を捨てることだ。快楽への欲望がある限り、神との合一には至れない。非実在ウツストを愛することによって、実在ウツストに至ることはできない」スワミジは語った。「実のところ、誰もが無神論者なのです。大そうな言葉を借りて、私はくどくどと宗教を語ります。しかし一度神を覚れば、真の信仰が得られるのです」

「我々は皆、無神論者でありながら、そのくせそのことを告白しようとする人とは戦おうとするのです。我々は誰も闇の中にいます。我々にとって信仰は単なる知的な語らいに過ぎません。上手に語れる人を信仰の人だと思いがちですが、これは信仰ではありません。魂のなかで実際の覚りが始まる

とき信仰はやって来ます。それが信仰の夜明けなのです。そうやって、本当の信仰が始まるのです」

聖ラーマクリシュナとナレンドラ——全宗教の調和

ナレンドラ及び、他の教養ある若者たちは、聖ラーマクリシュナがすべての宗教に尊敬の念をいだいておられることに驚いた。^{パラムハンサ}「どの宗教にも真理がある」と大覚者はためらうことなくおっしゃっていた。すべての宗教が真理であること、さらまたどの宗教を通じても神に至れることを語っておられた。一八八二年十月二十七日、コジャガラー——ラクシュミー・プー ज्याの日、ケーシヤブ・センは南神村の聖ラーマクリシュナに会いに蒸気船で向かい、そのままタクルを船にお乗せしてカルカタに戻った。途中二人は、船の中で多くのことを語り合った。数ヶ月前の八月十三日と同様の会話を交わした。宗教の調和についての二人の会話を、私の日記から引用しよう。

ケダルナート・チャトジュエー氏は、南神村のカーリー寺院で大きな饗宴^{キョウエン}を張っていた。饗宴が終わった午後三時か四時頃、タクルの部屋の南のベランダでたくさん^{ドゥキネンヨル}の信者たちと語り合っておられる。

聖ラーマクリシュナ〔信者たちに〕信仰の数だけ道がある。どの信仰も眞実だ。いろんな道を通じてカーリーガートに行くようなものだ。信仰は神ではない。様々な信仰に従うことで、神に至ることができるんだよ。

河がいろいろな方向から流れてきて、海に入っていっしょになるようなものさ。そこでは皆、ひとつになる。

いろんなやり方で屋根に上がることができる。石の階段でも上がれる。木の階段でも上がれる。竹バシゴでも上がれるし、それから綱をよじのぼっても上がれる。でも、これにちよっと足をのつけて

みたり、又、別なものに足をかけてみたりしては上がれないよ。一つの道をしつかりつかんでいなければいけない。だが、一旦上がってしまえば、どんな方法でも下りてこられる。そして又、上がったり……。

だから、まず一つの信仰に従うことだ。神が覚れたら、どんな信仰によつても行ったり来たりできる。ヒンドゥー教徒といるときは、誰からもヒンドゥー教徒だと思われる。イスラム教徒といるときは、誰からもイスラム教徒だと思われる。そしてキリスト教徒といれば、キリスト教徒だと思われる、という具合にね。

いろんな宗教の人があの御方にいろいろな名前をつけて呼んでいるんだよ。ある人は神（イーシュワラ）と呼ぶし、ある人はラーマ、ある人はハリ（クリシュナ）、ある人はアッラー、ある人はブラフマンだ。名前は違っていても本体は一つ、おなじものだよ。

ひとつの貯水池に四つの水汲場ガートがある。ヒンドゥー教徒は或る水汲場で水を汲んでジャルといい、イスラム教徒は別な水汲場で汲んでパーニーと呼び、キリスト教徒はまた別な水汲場で汲んでウォーターと呼んでいる。また、ほかの人たちは別なところから汲んで、アクアと言っている（皆笑う）。みんな同じ水なのに、名前だけ違うんだよ！ 口論してどうなる？ みんな同じひとつの神様に呼びかけていて、みんなその御方のところに行くんだよ」

ある信者「聖ラーマクリシュナに向かつて）もし、ある宗教に間違いがあるとすれば？」

聖ラーマクリシュナ「どの宗教にだって間違いはあるよ。誰もが自分の時計だけ正しいと思ってい

るんだが、どの人も完全に正しくは動いていない。だから時々、お天道さまに合わせて時間を調整しなくちゃいけないだよ。

どの宗教にだって間違いはあるよ。だが、間違いがあつたとしても、誠実で熱心ならば、あの御方はちゃんと聞いて下さるよ。

父親に大きいのやら小さいのやら何人か子がいるとする。一人、二人は、パパとか、お父さんとか、ちゃんと呼ぶことができる。ほかの小さい子はパーと呼んでみたり、トーと呼んだり——完全に発音できないもんだから。お父さんと呼ぶ子だけを父親は可愛がるだろうかね？ パーとか、トーとしか言えない子を差別するだろうかね？（一同笑う） そんなことはないさ。父親はどの子も全部かわいいんだよ。

（原典註2）
自分の信仰は本物だ、神が分かつた、と思つている人たちは、分かつちやいないのさ。自分はちゃんと神を求めているが、ほかの人は求めている。神様は自分には恩寵を垂れて下さっているが、ほかの人には与えていない。こう思っている人たちは、神様がみんなの父さん、母さんであるのを分かつていないんだ。真剣であれば、神様は誰にでも慈悲深くして下さるんだよ」

愛の信仰がどのようなものかについて、タクルは重ねて説明されている。だが、どれだけの人に

（原典註2）英語で書かれたマックス・ミュラーの著書『ヒバートにおける講演』にも、同様の話がある。マックス・ミュラーも神々を礼拝する人々を嫌つてはならないことを、同じ隠喩を用いて説明している。

それを理解できただろうか？ ケーシヤブ・センにしても、どの程度理解していたことだろうか？ この燃えるような愛の公式を伝授されていたスワミ・ヴィヴェーカーナンダには、その教えを世界に宣布することができた。聖ラーマクリシュナは、教義に頼ってはならないことを繰り返して説かれた。自分の信仰が正しく、他の信仰は間違っているという教義主義が、あらゆるもめごとの始まりなのだ。スワミジージーは、シカゴの宗教会議でこの件に言及している。キリスト教、イスラム教などの宗教の名においてどれほどの血が流されたか、どれほどの暴力、殺戮がなされたかを語っている。

「宗派主義、偏見、そこに由来する恐ろしい狂信が、長い間この美しい地球に取り憑いてきました。暴力を蔓延^{はびこ}らせ、時に人々の血で溢れかえらせ、文明を破壊し、数々の国家を絶望に追いやってきたのです」（ヒンドゥー教に関する講義——シカゴ宗教会議）

別の講演でのスワミジージーは、すべての信仰は真理であるとして、科学的論拠を挙げての説明を試みている。

「仮にこうした宗教の一つが勝利して、他の宗教が減びることで調和がやってくると信じている方があるなら、『兄弟よ、それは叶わぬ希望です』と、私は申し上げましょう。キリスト教徒がヒンドゥー教徒になることを私が望むでしょうか？ とんでもありません。ヒンドゥー教徒や仏教徒がキリスト教徒になることを望むでしょうか？ とんでもありません」

「種が大地に蒔かれて、土と空気と水が与えられます。だからと言って、その種が土や空気や水になるでしょうか？ いいえ、それは草や木になるのです。土、空気、水を吸収し、それを植物に変える

ことで草や木に成長するのです」

「信仰の場合も同じことです。キリスト教徒がヒンドゥー教徒や仏教徒になったり、ヒンドゥー教徒や仏教徒がキリスト教徒になったりするものではありません。互いの信仰の精神を吸収しつつ、自分の信仰の個性を保ち、各自の成長の法則に従って成長すべきなのです」

アメリカでのスワミジューは、ブルックリン倫理協会でのヒンドゥー教に関する講演を行った。ルイス・ジェーンズ博士が議長を務めた。ここでもスワミジューの最初の言葉は、宗教の調和に関してだった。特定の宗教が真理であり、他はすべて間違っているということはありません、とした。自分の宗教だけが正しいとするのは、病気のようなものだ。誰にも五本の指がある。仮に六本指の人がいるならば、その人は異なっている、と言わねばならないだろう。

「真理は、いつの時も普遍であり続けてきました。もし皆さんが五本指なのに私だけが六本指ならば、皆さんはそれが自然の真意だとは思わないでしょう。異常で病的なものだと思ってしまう。宗教についても同じです。もしも一つの宗教だけが正しく他は間違いということになれば、その宗教もまた、病んでいると言わねばならないのです。一つの宗教だけが正しいのならば、他の宗教はすべて間違っているはずですよ。かくしてヒンドゥー教は私のものであり、また皆さんのものでもあるのです」
(ブルックリン倫理協会での講演)

シカゴ宗会議でスワミジューが語り始めると、魅了された六千人の聴衆が立ち上がって拍手喝采を送った。彼は次のように語った。

(原典註3)

「寛容であること、万人を受け入れることを世に知らしめてきた宗教に属していることを、私は誇りに思います。広く寛容であるのみならず、私たちはすべての信仰を真理として受け容れます。排他の訳語を持たない聖なるサンスクリット語を言語とする宗教に属していると皆さんに語れることを、誇りに思っています」

タクール、聖ラーマクリシュナ、ナレンドラ、カルマ・ヨーガと愛国主義

聖ラーマクリシュナはいつもおっしゃっていた——「私」と私のものが無智で、あなた」とあなたのもの」が智識だ」と。一八八四年六月十五日、日曜日、スレッツシュ・ミトラ（スレンドラ）邸の中庭で大きな祝祭が催された。そこには聖ラーマクリシュナと多くの信者たち、その中にはブラマ協会の会員たちもいた。タクールはプラタプ・チャンドラ・マズンダールその他の信者におっしゃった。「私」と私のものが無智だ。ラースマニがカーリー寺院を建てたと人は言う。誰も、神様が建てなすつたのだ」とは言わない。ブラフマ協会はこれこれの人がやっている」とは言うが、誰も、神の御心みこころであれはできたのだ！」とは言わない。私がしている——これが無智というものだ。おお神よ、あなたが行為者カルタ、私は非行為者アカルタ、あなたが使い手、私は道具——これが智識というものだ。神さま、私は何も持っていません。この寺は私のものじゃない。このカーリー寺院は私のものじゃない。この協会は私のものじゃない。すべてはあなたのもの。この妻も息子も家庭も、みな誰一人、私のものじゃない。すべてあなたのもの——これを智識と言うんだよ」

「私のもの、私のものといって、何にでも愛着しているのがマーヤーだ。あらゆるものを愛するのがダヤー（慈悲）だ。ブラフマ協会の会員だけを愛するのはマーヤー（迷い）だ。しかし、すべての国の人を愛し、すべての宗教の人々を愛する心はダヤー（慈悲）から生まれる。神への信仰から生まれる。マーヤーによって人間は縛られ、神から背いてゆく。慈悲によって神をつかむことができる。シユカデーヴァやナラダのような方々は慈悲の人だった」

「自分の同胞だけを愛するのはマーヤー（迷い）だ。しかし、すべての国の人を愛し、すべての宗教の人々を愛する心はダヤー（慈悲）から生まれる」とタクルルはおっしゃった。ならばスワミ・ヴィヴェーカーナンダは、なぜあれほどまでに母国を思いやったのだろうか？

シカゴ宗会議でのある日、スワミジーが言った。「母国の貧しさに苦しむ民衆への寄付を求めてここに参りましたが、キリスト教徒から、キリスト教徒以外の人々への献金を募ることが非常に難しいことが分かりました」

東洋が今まさに必要としているものは、宗教ではありません。宗教は充分なのです。灼熱のインド

（原典註3）「ヴィヴェーカーナンダの第一声『アメリカの兄弟姉妹たちよ』を聞いて湧き起った拍手喝采は、数分間もの間鳴り止まなかった」（パロー博士の報告）

「雄弁なスピーチの多くは簡潔だったものの、宗会議の精神とその限界を彼ほど巧みに言い表したヒンドゥー僧侶はなかった。彼は神授の資質に恵まれた雄弁家だ」（ニューヨーク・クリティック一八九三年）

に喘ぐ無数の民が干涸らびた喉で求めるのは、パンなのです……」

「我が国の貧しさに苦しむ民衆のための救済支援を求めてここに参りましたが、キリスト教国に住むキリスト教徒から異教徒への援助を得るのがいかに難しいかを実感しました」(宗教会議前のスピーチ——シカゴ・トリビューン)

スワミジの愛弟子シスター・ニヴェディタ(マーガレット・ノーブル嬢)は、シカゴに住んでいたスワミジが、どの宗教(ヒンドゥー教、イスラム教、ゾロアスター教)に属す人も、出会ったインド人すべてに深い愛情を注いだことを語っている。滞在先の裕福な家によくインド人を招くと、家の主人もその客人を大変丁寧に扱って言ったと言っている。さもなければ、スワミジが家を出て他のところへ行ってしまうことをよく承知していたからだとしている。

「シカゴでの世界大博覧会に出席していたインド人は、貧富や身分を問わず、ヒンドゥー教徒も、イスラム教徒も、ゾロアスター教徒も、誰彼かまわず宿泊先に連れて行かれて手厚いもてなしを受けました。そして接客に落ち度があれば、たちまちスワミジが出て行ってしまうことを家の主たちはよく知っていました」

いかにしてインドの同胞を貧苦から救い出すか、いかにして然るべき教育をほどこして靈的に成長させるか、スワミジは常に思いを巡らしていた。しかし自国の民に対するのと同様、アフリカ系黒人に関しても憂慮していた。スワミジがアメリカ南部を旅していた時、有色人種か黒人と思われて家への受け入れを断られたことがあったと、シスター・ニヴェディタは述べている。しかし、一旦ヒ

ンドゥー教の著名な僧侶スワミ・ヴィヴェーカーナンダだと分かると、非常に丁寧なもてなしを受けたのだ。そして「『アフリカ人か?』と問われた時、なぜ何も言わないまま去られたのですか?」と尋ねられたのである。

スワミジューは応えた。「しかし、なぜですか? アフリカの黒人は我が兄弟ではありませんか?」すなわち、「世界中の誰もが同胞者なのではありませんか?」と。同胞者を愛するのと同様に、黒人も愛すべきである。しかし人は、いつも一緒にいる同胞者を優先するのだ。この教えは、執着のない奉仕と呼ばれる。

これはまた、カルマ・ヨーガとも呼ばれる。誰もが仕事を為すが、どんな見返りも期待せずに働く事は非常に難しい。すべてを放棄して孤独のうちに長時間神を瞑想することなくして、祖国を援助することはできない。私の国とは言つてはならない。それはマヤーだからだ。そこに住む者はみなあなた(神)のものだからこそ、彼らに仕えたいのだ。神の命令だからこそ、祖国に仕えたいのだ。これは神の仕事なのだ。すなわち神の僕しもなるがゆえに、たとえ成功しようとも、たとえ失敗しようとも、誓いを守るのだ。神はご存知だ。名声と名譽の為ではなく、ただひたすら神の栄光が照らし出されんが為であることを――。

真の愛国心とは何か? スワミジューがこの厳おごそかな誓いを立てたのは、その理想を人々に教えるためだった。家庭を持つ者、神を求めたことのない者、放棄の言葉をせせら笑う者、心が常に金と女や世間的な名譽・名声に向いている者、人生の理想が神を覚ることだと聞いて唾然とする者……。彼

らに母国のための高邁な理想がどうして受け入れられようか？ 確かにスワミジューは祖国のために涙を流したが、また同時にこのはかない世にあつて、神のみが実在、他のすべては非実在であることを忘れたことはなかった。西洋から戻ったスワミジューは、アルモラにヒマラヤを見に行つた。アルモラに住む人々からは、まるで生き神のように崇められた。山々の中の王として讃えられるヒマラヤの高峰を見たスワミジューは、感無量になつて言つた。「世俗の喧騒を捨てた賢者たちが、昼夜、神を思つて修行に明け暮れた聖なるウッタラーカンド（インド北部）に、今日私は、放棄の聖地を見ている。ヴェーダのマントラは、彼らの唇を通して流れ出したのだった。ああ、そんな日が来るのはいつのことだろう？ いくつかの仕事をし終えたいという願望はあるのだが、久しぶりにこの聖地を訪ねて、仕事を続けたいという願望は落ちていく。今は孤独のうちに座して、ハリの蓮華の御足を思いつつ、深いサマーデイに溶け込んで人生最後の日々を過ごしたい」

「賢者たちが暮らし、哲学が生まれた父なる山のどこかで最後の日々を送りたい、というのが人生の望みです」（アルモラでのスピーチ）

ヒマラヤを目にして、仕事への願望はすっかり落ちてしまった。放棄という仕事（カルマ・サンニヤーサ）だけが唯一思い浮かんだ。

「父なるヒマラヤ連峰を目の当たりにすると、働くことへの性向、長年頭の中を騒がせてきたものはすっかり静まり返つて、その場の靈氣に木霊していた永遠のテーマ、ヒマラヤを渦巻いて流れる川から今なお聞こえるせせらぎのテーマ、すなわち放棄へと我が心は立ち帰つた」（『スワミ・ヴィヴェー

カーナンダ全集第3巻】コロンボからアルモラでの講義——アルモラでの歓迎へのスピーチと応答）
この放棄、この無執着が達成されると、人は恐れを知らぬ者となる。他はすべて恐れをはらんで
るものだ。

サルヴァム・ヴァストゥ・バヤーンヴィタム・ブーヴィ・ナルナーム・

ヴァイラーギャメーヴァバーヤム（ヴァイラーギャ・シャットカム 31）

人生のすべては恐れと関わるものだ

人を恐れを知らぬものとさせるのは、放棄だ

ここに至れば、宗派主義は感じられなくなる。信仰に関わる論争は消え去る。唯一至高の真理が心
に確立される。人生で大切なことは見神で、他はすべて泡くずだ。

人生唯一必要なのは神を崇めること^{あか}で、他はすべて幻想だ。神のみが実在、他はすべて非実在だ。

一旦蓮の花にとまった蜂は、もうブンブン言わなくなるものだ。

「宗派間の争いや教義上の違いがすべて忘れ去られ、あなたの宗教」と私の宗教」という対立が
消え失せるとき、力強い魂たちはいずれ、この父なる山へと引き寄せられるでしょう。内なる神の認
識という唯一永遠の信仰のみがあること、他は泡のごとく実質のないものであることを人類が理解す
るとき、この世が虚飾に過ぎないこと、神の礼拝と神以外はすべて無用であることを知るとき、

熱烈な魂たちは、ここにやって来るでしよう」(アルモラでのスピーチ)

タクル、聖ラーマクリシュナは、「アドヴァイタ(不二元)の智識を着物の端に結びつけて、どこにでも好きなところへ行くがよい」とよくおっしゃっていた。スワミ・ヴィヴェーカーナンダはそのアドヴァイタの結び目を衣の端につけて仕事に従事したのだ。サンニヤーシンにとつて、家、富、他人、身内、祖国、異国とは何だろうか？ ヤージニャヴァルキヤは妻のマイトレイーに言った。「神を覚らずして、富や教養が何になろう？ マイトレーイー、まず彼を知るのだ。他はその後だ(プリハド・アーラニヤカ・ウパニシャッド 4章5節)」スワミジーはまさにこの考えを世に広めた。彼は言った。「おお、世の人々よ、まず世俗の快樂を捨て、孤独のうちに神を礼拝せよ。その後で好きなことをするがよい。そうすれば、何の害もないだろう。祖国に仕えよ。そして望むなら家庭を持ちなさい。神が万物に宿られること、神以外他はないこと、世界と祖国は神なくして存在しないことを知るとき、何の害もない。神を覚った後には、この世すべてが神のみであることを知るだろう」^{リシ}賢者ヴァシシュタ・デーヴァがラーマに言った。「ラーマよ、私といっしょによく考えてみよう。それから世を捨ててもおそくはない。では、聞くがね——この世は、神の外にあるのかい？ もしそうなら、サツサと捨てたらいいだろう」アートマン(真我)を覚っていたラーマはそこで黙ってしまった。聖ラーマクリシュナは、「まず使い方を覚えてからナイフを手に取りなさい」とおっしゃっていた。スワミ・ヴィヴェーカーナンダは、真のカルマ・ヨーギーについて説明した。祖国のために、何ができるだろうか？ 金銭的に貧民を援助すること以外にも多くのなすべき義務があるのを、スワミ

ジーは知っていた。最高の義務とは、彼ら貧民に神の知識を伝えることだ。次に教育という援助があり、その次に命の援助だ。そしてそれから貧者に衣食を施すのだ。どのくらいの間、世の不幸を取り除いておけると言うのだろうか？ 聖ラーマクリシュナがクリシュナダース・バル(訳註1)にお尋ねになった。「人生の目的は何だ？」ってきいたら、「世のために役に立つことをすること、苦しみをなくすことだと思いません」と答えた。するとタクルは苛立(いらだ)っておっしゃった。「あなたの言うことは、若後家の息子の浅知恵(訳註2)だ。世の辛酸をどれだけ救えると思ってるのかね？ 世界はそんなに小さなものかね？ 雨季のガンガーには蟹(かに)がいるのを知ってるかい？ それと同じで数知れない世界があるんだよ。この宇宙の大師であられる御方が、すべての世界の面倒を見て下さる。人生の目的は、まず第一に神様を知ることだ。それから好きなことをするがいい」スワミジーもどこかで以下のように言っている。

「不幸を永遠に取り去ってくれるのは唯一靈性の知識だけで、他の知識は欲求をしばらくの間満たしてくれるだけです。靈性の知識を与えてくれる人が人類最高の恩人なのです。この靈的救済（ブラフ

(訳註1) クリシュナダース・バルはカルカッタの裕福で著名な慈善家。これは一八八四年十月十一日に南神寺院(ドゥラマキリシュナ)に聖ラーマクリシュナをお尋ねしたときの会話。

(訳註2) 若後家の息子の浅知恵（ランディ・ブッティ・ブッティ）——他人の顔色を見ながら人にへつらって生きてきたためについた浅知恵の意。

マ・ジュニヤーナ)の次に来るのが知的救済(ヴィディヤー・ダーナ)——すなわち世俗の知識という援助です。これは衣食の援助よりは遥かに高尚なものです。その次が命の援助で、四番目が食べ物の援助です」(カルマ・ヨーガ、ニューヨーク)(私のキャンペーン計画、マドラス)

神を覚(さと)ることこそが人生の目的であり、この国最大の関心事だ。まずこれが為され、他はその後だ。初めから政治を語っても仕方ない。まず集中力をもって神を冥想し、胸(ハート)の内に神を見ることだ。神を覚れば、心が執着を離れているので、祖国への善行を為しうる。私の国と考えていては祖国に尽くすことはできない。万人の中に住み給う神に仕えさせて頂くのだ。そうなれば、祖国と外国の区別を見なくなるだろう。そうなれば、いかにして他者への善行を為せるかが本当に見えてくるだろう。聖ラーマクリシュナは「将棋を指している本人たちより、傍(はた)で眺めてる人の方が得てして正しい駒の進め方がわかるものだ」とおっしゃっていた。執着を離れた人は、自分のために何も必要としないからだ。執着と悪意を離れた人、霊性の人、まさに今生で解脱する人、長年修行を行じて神に至った人は、神以外はすべてがイヤなのだ。

この境地に定着すれば、至高最大の宝を獲たことを知る

ここに安定すれば、いかなる困難にも動揺せず

——ギター6・22——

この理由から、ヒンドゥー教徒の政治、社会の掟はすべて宗教的規則だ。マス、ヤージニャヴァル

キヤ、ブラシャール他の大聖者がこうした聖典を記した。彼らには何の必要もなかったが、神からの命を受けて家住者のために執筆したのであった。執着を離れて、将棋の駒の正しい動かし方を提言しているのだ。このため、彼らの言葉には、場所、時間、人物の違いによるいかなる間違いも存在しない。スワミ・ヴィヴェーカーナンダは、カルマ・ヨーギーでもあった。無執着の精神で人類への奉仕を誓った。まさにかけがえない働き手だった。人類の為に善をなした古の聖者のごとく、執着を離れて祖国のために尽くした。願わくば我々もまた、無私（ニシュカーム）の心でこの信仰の道の足跡を辿（たど）れんことを——。だがこれは、なんと難しいことだろう！ まず第一にハリの蓮華の御足に至らねばならない。それには、ヴィヴェーカーナンダの放棄の精神と厳格な修行（まご）に倣（なま）わねばならない。これができてこそ、相応（かきわ）しい者となれるのだらう。

幸いなるかな、偉大なる放棄の聖者！ あなたはまさに師の意志を継いだのだ。グルデーヴァ（師）の偉大なマントラだった。最初に神を覚（さと）り、それから他のことを為（な）せ、を真に実践したのでだから——。神を信じなければこの世は夢、手品のようなものであることをあなたは理解した。だから全てを捨てて修行に専念したのだ。神こそがすべての生命だと知った時、神しか他にないことを知った時、あなたは心をこの世に向けたのだ。おお、マハーヨーギン！ 万物に宿るハリ（神）に仕（つか）えるため、働きという領域に戻ってきたのだ。こうしてあらゆるヒンドゥー教徒、イスラム教徒、キリスト教徒、外国人、同胞人、富める者、貧しい者、すべての男女が、あなたの無限の愛の一部となったのだ。法悦の愛ですべての人たちを抱擁したのだ。激しい放棄の精神に駆られて黄土色の衣をまとい、涙ながら

に生みの母を後にしたのだ。しかし後にはその母性愛に感謝して、彼女の願いを叶えるために再会を果たしたのだ。そしてナラダやジャナカのごとく、人類を教え導くために尽くしたのだ。

聖ラーマクリシュナ、ナレンドラ、ケーシャブ・センと有形の神の礼拝

〔神は有形か、無形か？〕

ある日、ケーシャブ・チャンドラ・センが弟子たちを連れて南神村のカーリー寺院に聖ラーマクリシュナをお訪ねした。ケーシャブと共にタクルは、しばらく無形の神についてお話しになった。大覚者^{パラマハンサ}は彼におっしゃった。「私はカーリーを土くれや石の像だとは思わないよ。たましいのこもった聖像だ。ブラフマンである御方が、同時にカーリーなんだからね。それが不動のとき、ブラフマンというだけだ。創造、維持、破壊をするとき、カーリーと呼ぶんだ。大実母カーリーは時^{カウラ}と交接なさる。時^{カウラ}とブラフマン——不異^{おなじ}ものだ」

聖ラーマクリシュナ「(ケーシャブに) どんなふうなものなのかわかるかい？ サッチダーナンダ(真実在・智慧・歓喜)は果てしない大海のようなもの。信仰の冷やす力で、ところどころに氷ができていて。水が氷の形に固まっている。つまり、信仰者のためにあの御方は形をとって現れて下さるんだよ。そして又、^{ブラフマ・ジュニヤト}智識の太陽が上ればその氷は溶けてしまう。神だけが本当の実在で、この世は一時のはかないものだど覚ると三昧に入る。すると、形や相^{すがた}は蒸発してしまふ。そうなるともう、あの御方はどんなものか、口では言えなくなる。普通の心や知性ではあの御方は理解できないよ」

「ひとつのことがちゃんと分かっている人は、他のことも分かってくる。無形の神を知る者は、有形の神のことも知っている。近所にも出かけたことのない人は、シャームブルやテリバラがどこにあるのか、どうやって知れよう。姿なき神は誰もが信仰できるわけじゃない。だから姿ある神様を拜むことがどうしても必要なんだよ」

大覚者様は、さらに説明された。「お母さんに五人の子供がいる。魚が手に入った。お母さんはいろいろな料理をこしらえて下さる。——みんなの胃に合うようにね！ ある子には魚のピラフ、また腹をこわしている子には魚のスープをこしらえてやる——胃袋で消化消化す力が違うからね」

「この国の人々は姿ある神様を信仰している。キリスト教の欧米の宣教師は、インド人のことを野蛮人呼ばわりしている。インド人は人形崇拜者でひどい有り様にある、なんて言っている」

スワミ・ヴィヴェーカーナンダは、アメリカで初めて姿ある神を信仰することの意味を説いた。彼は、「インドに人形崇拜はない」と言っている。（訳註——偶像崇拜ではなく、人形崇拜と言っている）

「まず第一に、インドには多神教はない、と申し上げておきましょう。どの寺院に行っても、たまたんで耳をすますなら、参拝に来た人たちが神像の中に神のあらゆる属性を見ていることに気づくでしょう」（ヒンドゥー教についての講義、シカゴ）

スワミジーは、「神を思い始めると、有形の神しか心に思い浮かばない」という心理学の助けを借りて説明している。

「キリスト教徒はなぜ教会へ行くのでしょうか？ なぜ十字架は神聖なものなのでしょうか？ 祈る

とき、なぜ顔は空に向けられるのでしょうか？ カトリックの教会にはなぜあのようにたくさん神像があるのでしょうか？ プロテスタントが祈るとき、なぜ多くの神像が心に浮かぶのでしょうか？ 兄弟たちよ、私たちは呼吸せずには生きていけないように、物理的イメージを持たずには、何ひとつ思うことはできないのです。『遍在』という言葉は、世のほとんどの人にとって、なんの意味も持ちません。神に表面的なところがあるでしょうか？ 私たちが『遍在』という言葉を繰り返しても、思い描けるのは地の果てのイメージだけなのです」（ヒンドゥー教についての講義、シカゴ）

スワミジーは言った。「有形、無形の神の信仰は、礼拝者次第です。有形の神を礼拝することは、罪あること（クサンスカラ）でも幻影でもありません。低次における真理なのです」

「神像の助けを借りることで自らの神聖な性質を容易く覚たやすられるならば、これを罪と呼んでいいものでしょうか？ またこの段階を過ぎた後、神像の助けを借りたことが間違이었다、と言うべきでしょうか？ ヒンドゥー教では、人は過ちから真理へと向かうのではなく、低次の真理から高次の真理へと向かうとしています」

スワミジーは、「全員に通じるひとつの規則はありえない」とした。神はひとつでも、異なった信者の前には様々な姿をとって現れるのだ。ヒンドゥー教徒はこれを理解している。

「統合とは、自然の計画における多様性のことで、ヒンドゥー教徒はこれを認識しています。他の宗教では一定の教義を唱えて、これを社会に強しいようとしています。すなわちジャックにも、ジョンにも、ヘンリーにも、誰にもぴたり合うはずの同じ上着を社会に提示するのです。ですから、もしもジャック

クにも、ジョンにも、ヘンリーにも合わなければ、何も身体に纏まとわずに出かけねばなりません。ヒンドゥー教徒は、絶対なるものが相対なるものを通してのみさと覚られ、思われ、語られることを発見したのです」

聖ラーマクリシュナ、ブラフマ協会、ナレンドラ、そして罪の教義

スワミジীরの靈性の師、バガヴァン、シュリー至聖、聖ラーマクリシュナはよくおっしゃっていた。「あの御方の名を唱え、誠実に神を瞑想するならば、罪は消えてなくなる。綿わたの山に火を着けたら、たちまち燃え尽きるようなものだ。あるいは、木に止まった鳥を見てみる。手を叩けば飛んで行ってしまいうだろう」

ある日タクールは、ケーシャブバブ氏と話しておられた。

聖ラーマクリシュナ「(ケーシャブに) 心で縛られ、心で解脱する。私は自由な魂だ。世俗の生活をしていようが、密林のなかに住もうが、何ものにも束縛むすなんぞされるものか。私は神の子だ、王の中の王の息子なんだ。誰がこの私を束縛出来るものか」と、こう思っている。たとえ蛇に咬まれたって、毒はない、毒はない」と断固として言い切れば毒は消えてしまふんだよ！私は束縛むすなんかされていらない、私は自由だ」と、いつもこの言葉を断固として言い続けていると、本当にそうなつていくんだ。自由になるんだよ。

ある人がキリスト教の本(聖書)をくれたので、読んできかせるように言った。そしたらただもう、罪また罪。わたしは束縛むすされている。わたしは束縛むすされている。なんてばかり言っていたら、そん

な人間は束縛されるのに成功するだけ！ 昼も夜も、わたしは罪人だ、わたしは罪人だ」と言っていれば罪人になるだけのことさ。

神様の御名に対してこんな信念を持つようにならなくちゃね——私は神の御名を称えているのだから、なんで私のところに罪なんかが宿つていられようか！ いまさら罪なんて何だ。束縛されるつてどういうことだ？ とね。クリシュナキシヨルは、それはもう立派なヒンドゥー教徒で正統なバラモンだが、彼がプリンダーヴァンに行ったときのこと、ある日、終日歩き続けて、たいそう喉が渴いた。井戸を見つけてそばへ行って見たら、一人の男が立っていた。「これ、私に壺一杯の水を汲んでくれんかね？ お前のカーストは何だ？」と彼に声を掛けたら、彼が答えるには、「尊いお坊さま、私は賤しいカーストの身分で、靴を作っている者でございます」クリシュナキシヨルは言った。「大神シヴァの御名を称えろ。さあ、もう構わない、水を汲んでおくれ」

神の名を称えると、人間の身体と心はすべて浄められる。それなのに罪だとか地獄だとか、そんなことばかりで言っているのは一体どういうわけだろう？ 一度こう言えばいいんだ。神様、間違つた事をしましたが、二度とこういうことはいたしませんと。そして、あの御方の名を信じ切つていればいいんだ」

スワミジーは、罪の教義についてもキリスト教徒に話している。「罪なんて何だ！ あなた方は永遠の至福の子供たちではないか！ あなた方の司祭は、昼も夜も地獄の炎の話をしている。そんなことに耳を傾けてはならない」

「皆さんは神の子、永遠の至福を分かち合う完璧で聖なる存在なのです。地上に降りた神の子なので。それなのに罪人などは！人をそう呼ぶことこそが罪なのです。来たれ、おお、獅子たちよ！皆さんは不死の魂、自由で祝福された永遠の霊なのです。肉体ではありません。物質が皆さんの召使いであって、皆さんが物質の召使なのではありません」（ヒンドゥー教についての講義、シカゴ）

スワミジューは、アメリカのハートフォードという場所でのスピーチを依頼された。ここでは領事のバターンソン氏が議長を務めた。スワミジューは再び、キリスト教の罪の教義について語った。家の中が暗い時、「暗い、暗い！」と叫んでもどうにもならない。ランプを灯せは明るくなる、と教えている。「ひざまずいて『ああ、私は哀れな罪人だ』と叫べ！」と助言すべきでしょうか。いいえ、そうではなく自らの神聖な性質を思い起こさせるべきでしょう。部屋の中が暗いからといって、胸を叩いて『暗い！』とわめき回るでしょうか？そんなことはしないでしよう。明るくする方法は唯一明かりをつけることで、そうすれば闇は消えるのです。頭上の光を覚る唯一の方法は、自分の内なる霊性の明かりを灯すことです。そうすれば、不純な暗闇や罪は飛び去ってしまうでしょう。低次ならぬ、高次の自己を思うことです」

スワミジューは、大覚者様から例え話を聞いていたが、彼も同じ話を語っている。「山羊の群れに牝虎が襲いかかった。跳びかかった拍子に肚の仔を産み落としてしまった。牝虎はそこで死に、仔虎は山羊の群のなかで大きくなった。山羊は草を食べるから仔虎も草を食べる。山羊がビャービャー鳴くから仔虎もビャービャー鳴く。仔虎は随分大きくなった。ある日、その山羊の群に雄の虎が襲いか

かった。彼はそこに草喰い虎がいるのを見てびっくり仰天した。それで追いかけて行って、その草喰い虎をつかまえた。虎のくせにビャービャー情けない声を出して震えている。そいつを水の際きわに引張つてきた。『見ろ、水に映ってるお前の顔を見ろ。おれとそっくりだろうが』それから生肉を持ってきて、『これを食べ』そう言つてムリヤリ食わせた。いやがつてビャービャー鳴いていたが、だんだん血の味が分かつてきて自分から食べはじめた』

聖ラーマクリシュナ、ヴィジャイ、ケーシャブ、ナレンドラと、**女と金を捨てること**
 ——放棄サニヤサ

聖ラーマクリシュナとヴィジャイ・クリシュナ・ゴスワミーが、ドワキトシヨル南神村のカーリー寺院で話しておられた。

聖ラーマクリシュナ「(ヴィジャイに) 女と金を捨てなければ人を教え導くことはできない。見てごらん。ケーシャブ・センにはできなかった。女と金カネの中で暮らして、『神だけが本当の実在で、この世は一時のはかないものだ』なんて言つたつて誰も信じやしないよ。自分で糖蜜をすぐわきにおいておいて、『これは食べてはいけない』などと言つても人は聞かないよ。だからチャイタニヤデーヴァ様はいろいろ考えた挙句(訳註3)に世を捨てなすつた——人びとを導くためにね。

ヴィジャイ「本(原註5)当にそつでございます。チャイタニヤ様デーヴァはこう言いました。『ピツパルの種から咳止めの薬が作られた。ところが結果は反対で、もつと咳が出るようになってしまつた』ナヴァドウィー

プの人たちははからかって言いました。『パンデイット・ニマイ（チャイタニヤ）はたいそう楽しんでるよ。美人の奥さんがいて、名声があつて、お金にも事欠かない。まったくうまくやつてるよ』

聖ラーマクリシュナ「ケーシヤブがすべて捨てていたなら、もつと立派な仕事が出来ただろうに——。牡山羊を大実母へお供えするんだが——ほんの少しのキズがあつてもいけない。すべてを捨てた人で

（原典註4）『アキヤイカ・ブコロナム・サーンキヤ・ダルシヤン（サーンキヤ聖典の寓話の章）からの話。以下は補足——この例え話の解説を聖ラーマクリシュナがされているので一八八三年十二月二十四日の記述から引用する。

「草を食うことは女と金にくつついてることだよ。ビヤービヤー鳴いて逃げるのは世間一般の人間と同じように行動することだ。猛虎といっしょに行くのはグルが霊の意識に目覚めさせてくれることだ。その方にすべてお任せして、その方こそ自分の身内である、とさとることだ。自分の本当の顔を見ることは尊い自己の本性に気がつくことだ」

（訳註3）——『ニタイよ、私でもし世を捨てなかつたら、人びとのためにすることは出来ない。みんなが私のことを見て、世間のことをしたがるだろうからね。——女と金を捨てて、ハリの蓮華の御足に心を全部向けることに、誰一人努力する人はいないだろうよ！』（一八八四年五月二十五日『不滅の言葉』参照）

（原典註5）ナヴァドウィープでハリ称名の伝道が行われたことを意味する。以下は補足——ビツバル（アスワッタ）の種から咳止めの薬が作られたが、もつと咳が出るようになってしまったとは、人々のためにハリ称名を勧めてもらったが、返って世俗の人たちからは非難を浴びた、という意味。チャイタニヤは世俗の人々を苦しみから解放させようと思ひ、ハリ称名を勧めてもらったのだが、チャイタニヤはまだ家庭を持っており、社会的にも地位が高く、みんなはチャイタニヤの言うことを聞くどころか羨んで反感を買う結果となった。その後チャイタニヤが出家したことを聞いてからは、みんなは耳を傾けるようになり、ハリ称名が広まっていったのだ。

なければ教えることは出来ない。家住者の話を、いったいどれだけの人が聞いてくれると思うかい？」
 スワミ・ヴィヴェーカーナンダは、女と金を放棄した。それだから神について人々に教える資格があるのだ。ヴィヴェーカーナンダは、ヴェーダーンタ、英語、哲学において傑出した学者だ。稀に見る雄弁家だ。だが、それだけだろうか？ この質問には、聖ラーマクリシュナが応えられている。一八八二年、南神村のカーリー寺院で大覚者は、スワミ・ヴィヴェーカーナンダについて、信者たちに次のように語られた。

聖ラーマクリシュナ「この青年を見てごらん。イタズラツ子も、ここではこんなふうだがね。お父さんの傍にいるときは借りてきた猫みたいだ。廊下で遊ぶときは全く様子がちがうよ。この子のようなのは、永遠の完成者^{トワイヤシツツ}なのだ。かれらは、決して俗世に縛られない。も少し年齢^{とし}がいくと靈意識がめざめて、まっすぐに神へ向かって進むんだよ。彼らがこの世に生まれたのは、ただ人びとを教え導くためだけなんだ。俗世のことにはちつとも興味がなくて——つまり、かれらは決して女と金に心を奪われるようなことはない。

ヴェーダに、ホーマ鳥の話がある。大空はるかに高くその鳥は住んでいるんだよ。その高い空で卵を産む。卵はさっそく落ちはじめると——あんまり高いところなもんだから、何日も何日も落ちつづける。すると途中で卵が割れてヒナがかえる。落ちながらヒナの目は明き、羽も生えそろってくる。目が明くとヒナは自分が落ちつづけていること、そして地面にあたればコナゴナになって死ぬことを覚^{さと}るんだ。すると、そのヒナはすぐ向きを変えて、母鳥のいるところめがけて、猛烈な速さで高くかけ

昇るんだよ。

ナレンドラ(ヴィヴェーカーナンダ)はそのホーマ鳥だ。地面を見たときに、ヒナは向きをかえて母親の方角へ向かってものすごい速さでかけ昇る。そうして、母親のところへ戻り着く。母親の傍へかえることだけが目的なのだ。すなわち、世俗に巻き込まれる前に、神への道に逃げ込むのだ」

また、聖ラーマクリシュナはヴィディヤサガールにおっしゃった。「ハゲタカはなるほど高い処を飛んでいるが、目はいつも動物の死骸を探している。学者は沢山の聖典からいい文句をすらすら暗誦できるが、心はどこにある？ もしその心が神の蓮華の御足に捧げられているのなら敬意を払うよ。だが、もしも『女と金』にあるのなら、ワラクスが一本そこにあるような気になるんだよ」

スワミ・ヴィヴェーカーナンダはただの学者なんかではなく、サードゥであり、偉大な魂だった。イギリス人やアメリカ人が召使いのように彼に仕えたのは、彼の学識ゆえだけではなかった。彼が別格の人物であることを理解したからだだった。人々は名誉、富、感覚の喜び、学識などに興味を持つも

(原典註6) スワミ・ヴィヴェーカーナンダは当時ジェネラル・アセンブリー・カレッジで学んでいて、十九歳か二十歳くらいだった。シムリアにある大学の近くに家があった。父親のヴィシユワナータ・ダッタは、最高裁判所の弁護士だった。スワミジーの幼名はナレンドラだった。大学の学位試験に合格していた。ハステイ氏が学長だった。兄弟姉妹がいた。スワミジーが誕生したのは西暦一八六三年、ベンガル暦一二六九年ポウシユ月の終わりの月曜日で、日の出の六分前の午前六時三十分から三十三分の間だった。亡くなったのは三十九歳五ヶ月と二十四日目だった。

のだが、彼の目的は唯一、神を覚ることだった。サンニヤーシンの歌のなかで、「サンニヤーシンは女と金を捨てなければならぬ」と彼自身が言っている。

情欲、名声、利欲のあるところに真理はない

女を妻と見る男に完成はない

極わずかにでも所有する者

怒りに縛られる者は

マーヤーの門を通り抜けることはできない

それゆえ、これらを放棄せよ

果敢なるサンニヤーシンよ

♪オーム・タット・サット・オーム♪と唱えよ

(サンニヤーシンの歌)

アメリカでの誘惑は大きかった。世界的な名声を得た。上流階級の教養ある極めて美しい女性たちが語らいに来ては仕えたのだった。大変魅力的だった彼と結婚したがった女性は多かった。ある時、裕福な家族からの相続を受けた女性がやって来て言った。「スワミ、私は何もかもすべてをあなたに明け渡します」スワミジーは応えた。「貴女よ、私はサンニヤーシンで結婚はできません。私にとつて全ての女性は母なのです」

ああ、祝福された英雄よ！ あなたこそ真にお師匠様グデルツツに相応ふさわしい直弟子です。地の埃ほこりは未だあなたの体に触れていない。女と金の汚れがまだまったく染み付いていない。誘惑の国から逃げ出すことなく、そのただ中であつて、豊かさの国にありながら、神の道を歩んだ。凡人のように日々を過ごそうとはしなかった。燃えるような人生の模範を残して、死を定められたこの世を後にしたのだ。

聖ラーマクリシュナ、カルマ・ヨーガ、ナレンドラと貧者の内なる神ナーラーヤナに
無私の精神で仕えること

大覚者パラブレンサはよくおっしゃっていた。「誰もが義務を果たさなくてはならない。ジュニヤーナ（知識）、バクテイ（信仰）、カルマ（執着のない働き）、この三つが神に至る道だ」ギーターは教えている。「出家も在家も心を浄化するには、まずグルの教えに従つて報果むくいを期待せずに働かねばならない」——私が為している。と思うのは無知だ。富、人々、義務を自分のものとするのも、また無知だ。ギーターはまた、「自分が行為者ではないことを知って、行為の果報を神に明け渡しつつ義務を果たすべきだ」と教えている。「智慧を得た後も、人によつてはジャナカ王のようにあの御方のご命令でこの世で働きなすった」これはギーターが教えるカルマ・ヨーガだ。聖ラーマクリシュナも同様のことをおっしゃっている。

カルマ・ヨーガは大そう難しい道だ。かなりの長期にわたつて独り人里離れて修行を行わない限り、執着を捨てて働くことはできない。修行中はグルの指導が不可欠だ。まだ未熟な段階にあつては、ど

こから執着心が出てきてしまふか、誰もわからないからだ。心では、無私の仕事をしていゝつもりでも、いつの間にか有名になりたい気持ちが出てくるからだ。家住者、すなわち、家族、親族、私
の者という人たちのいる人は、他者のために無執着で働くことは難しい。その人から見習うことは
難しいことなのだ。

しかし、女と金を捨てたシッディ・プルシヤ（完成した魂）の人が無私の働きを為すならば、世
の模範となつて人々を教え導くことができるだろう。

スワミ・ヴィヴェーカーナンダは、女と金を放棄していた。グルの指示に従つて、独居しての
修行を長い間行なつて完成に至つた。真のカルマ・ヨーガの実践者だつた。しかし彼はサンニヤーシ
ンだつた。彼が望めば、賢者やグルだつた大覚者様のように、信仰と知識に暮らすこともできただ
ろう。しかし彼の人生は単に放棄の模範となることではなかつた。自分の所有物に囲まれて暮らして
いる世俗の人々がいかに執着を離れた生活を送るべきかを、身を以て示すためでもあつたのだ。ナー
ラダ、シユカデーヴァ、ジャナカ王のように、スワミジもまたその手本を庶民に示したのだ。サン
ニヤーシンのように、富、名声、名譽をカラスの糞のように見なし、決して享受したことはなかつた。
しかしなお、これらをいかに他者への奉仕に用いるべきかを、言葉と実践で教え伝えたのである。欧
米から集まつた喜捨は、すべて慈善に費やされた。カルカッタ近くにベルール僧院を、アルモラ近く
にマヤヴァティを、そしてカーシーやマドラスなど様々な場所に僧院を建てた。デ INA ジブール、ヴァ
イディヤナート、キシヤンガル、南神村などでは、飢饉に苦しむ人々に奉仕した。飢饉で両親を亡く

した子供達のために孤児院を作った。ラージプターナのキシヤンガルにも孤児院を建てた。サルガチーの村にあるムシダバド（バウダ）近くには、今でも孤児院がある。ハリドワール近くのカンカールには、病んだサードウの為のセヴァ・アーシユラム（奉仕の家）がある。ペストが流行った頃には、多大な費用を費やして疫病患者を救済した。彼は一人座して、貧困や飢饉に喘ぐ人々のために泣き、友人に語ったものだ。「ああ、あの人たちは神を思う時間もないほどに苦しんでいるのだ！」と。

グルに教えられた以外の仕事は、すべて束縛の原因となるものだ。サンニヤーシンだった彼が、どうして働く必要があっただろうか。

蒔いた種は刈り取らねばならない、と言う

そして原因は必ずや結果をもたらす

良き種は良き結果を

悪しき種は悪しき結果を

この掟を逃れることは、誰にもできない

姿形を纏ったものは

鎖も背負わねばならない

まさに本当だ

しかし名前と形の遥か彼方に

永遠に自由な真我アイトマンがある

汝はそれなり、と知れ

恐れを知らぬサンニヤーシンよ！

♪オーム・タット・サット・オーム♪と唱えよ

(サンニヤーシンの歌)

神は人々を教え導くためだけに、彼にこうしたあらゆる働きをさせたのだった。サードゥウも家住者も、グルの指示に従って一定期間、独り人里離れて修行することで神への愛を育て、執着なく働くことを学び、スワミジーのように慈善活動も行えるようになるのだ。スワミジーのお師匠グルデーツァさま、聖ラーマクリシュナは、よくおっしゃっていた。「手に油をぬってから狸好果カンタル(ジャックフルーツ)の実を割らなけりゃいけないよ！ そうしないと手にヤニがべたべたくっついてしまう」つまり、独りで修行して神への愛を得た後で、命令を受けて初めて、執着を持たずに世俗の仕事をこなせるようになるのだ。スワミ・ヴィヴェーカーナンダの人生に思いを馳はせることで、独居修行の何たるかを、人々を教え導く仕事の何たるかを垣間見ることができるのだ。

スワミ・ヴィヴェーカーナンダの仕事はすべて、人々を教え導くためだった。

ジャンカのような王たちでさえ

義務の遂行によって完成の域に達した

故に 世の人々に手本を示すためにも

君は自分の仕事を立派に行いなさい

——ギター3・20——

ギターに記されているカルマ・ヨーガは、極めて難しい。ジャンカ王たちは、働くことを通して靈性の完成に至った。「ジャンカ王は以前に独り人里離れて、どれほど修行なすったことか」と聖ラーマクリシュナはおっしゃっていた。それゆえサードゥは、世俗の喧騒を離れたところで独り、知識と愛の道を歩んで靈性の修行に打ち込むのだ。スワミ・ヴィヴェーカーナンタのように極めて有能な人、英雄だけにこのカルマ・ヨーガを実践することができるのだ。こうして神を経験しながら命令を受け、なおも世俗にあつて放棄の精神で働く大聖者マハトウルシヤがどれだけいるだろうか。人々への奉仕に積極的に関わって動き回り、**女と金**に一切染まることなく、神の愛に酔いしれる宗教指導者がどれだけいるだろうか。

スワミジーは一八九六年十一月十日にロンドンで行われた講演で、ヴェーダーンタにおけるカルマ・ヨーガを解説するギターの教えに触れている。

「妙な話ですが、これは戦場でクリシュナがアルジュナに哲学を教える場面です。そしてギターのページーページに燦然さんざんと輝く教えは、激しい活動です。しかもその活動の只中に永遠の静けさがあるのです。この理想こそが働くことの秘訣であり、ヴェーダーンタの目標に至るものであります」(実践的なヴェーダーンタ、ロンドン)

この講演のなかでスワミジーは、カルマ・ヨーガ(活動の只中にありながら平静であること)を果たすサンニヤーシンの気持ちについて語った。スワミジーは、怒り、憎しみ、ねたみを捨てて働くように努めた。これは彼の修行の質の高さと神の経験によってこそ為されたことだった。こうした平静さは、靈的に完成されているか、聖クリシュナのような神の化身にしか保てないことだ。

聖ラーマクリシュナとスワミ・ヴィヴェーカーナンダのヴァマチャラに関する教え

ある日、スワミ・ヴィヴェーカーナンダが南神寺院ドゥッキネーシヨルに聖ラーマクリシュナを訪ねた。バヴァナートとバブラムたちがそこに居合わせた。一八八四年九月二十九日のことである。ナレンドラが、ゴシユパラとパンチャナミーを話題に取り上げて尋ねた。「あの人たちは女性を相手にしてどのように修行をするのですか?」

タクールがナレンドラにおっしゃった。「お前がこんなものに耳を貸すことはない。カルタバジャ、ゴシユパラ、パンチャナミー、バイラヴィーヤバイラヴァには正しい修行はできない。落とし穴にはまってしまふのさ。汚い道でね、良くはないよ。きれいな道を通って行ったほうがいいね。カーシーにわたしが行ったとき、ある日、バイラヴィーの秘密の集まりに連れて行かれた。一人のバイラヴィーは一人のバイラヴァを連れてきていた。わたしにお酒カロンを飲めと言った。わたしは、『母さん、わたしはお酒を飲めないんだよ』と言った。やがて、彼等は飲みはじめた。わたしは思っていたよ、この次にはきつと称名や瞑想をするんだろうと。そうじゃなかった、踊り出したのさ!」

さらにナレンドラにおっしゃった。「わたしの場合は、（女に対して）母親に対する態度だ。子供の気持ちだよ。母親とみることに、これはとても清浄な態度でね、ちつとも危険なことではない。（神を）妻とみなす。勇者の態度はとてもむずかしい修行だ。なかなか正しい態度を続けていくことはできないで、墮落してしまう。お前たちはわたしの骨肉だから、わたしはお前たちに言っておく——最後にこのことがわかったんだよ。——神は全体、わたしはあの御方の一部分。あの御方は主、わたしは召使い。それから、時々はこういう気分になる——あの御方こそ、このわたし。わたしこそ、あの御方。神への信愛が真髓だよ！」

さらに一八八三年九月九日、タクルは南神村の信者たちにおっしゃった。「私のは子供の態度だ。アチャラーナンダは此処へよく来て泊まっていたよ。御神酒をこたま飲んだものさ。わたしが女と一緒にする修行を良く言わないもんだから、しまいにはこう言った。「あんたはどうして、女性に對する、勇者の態度の修行を認めないのかね？ タントラの修行にちゃんとある。シヴァの教えを否定するおつもりか？ 子供の態度と同様に、勇者の態度をとる修行もあるんだよ」

わたしは答えたよ——『そんなこと、誰が知るものか。わたしはそんなのはどれも嫌いだよ。——わたしは子供の態度だ』と」

「郷里にバギーと言う女の油職人がいて、カルタバジャ派（ヴィシユヌ派の一分派）の信者だった。そこでは女を相手に修行するのさ。そして女も男なしには修行できないのだ。相手の男のことをラーマクリシュナ（愛の理想クリシュナ）というがね。その男が三度、クリシュナを受け入れるか？」

と聞くんだよ。女は三度、^レはい、受け入れます」と答える」

一八八四年三月二十三日、聖ラーマクリシュナは、ラカール、ラム他の信者におっしゃった。「ヴァイシュナヴァ・チャランはカルタパジャ派に属していた。シャーマバザールに行った時、『わたしはそんなやり方をしない。わたしは女を母親だと思ふことにしている』と言ったよ。偉そうなことを言っている、その実、道ならぬことをしているのをわたしは知っていたからね。彼らは、神像などの中におられる神を拜むことは、一切ライクしない。生き身の人間がいいのだ。彼らの多くはラーダー・タントラの方法を実行している。五元素の原理で修行するわけだ。地の原理、水の原理、火の原理、風の原理、空の原理——糞、尿、経血、精液、これもみんな原理なんだよ！　こういう修行はとても汚い修行だ。ちようど便所につづく勝手口を通じて家に入るようなものさ！」

タクルの教えに従って、スワミ・ヴィヴェーカーナンダも女性を相手にする修行（ヴァマチャラ）を非とした。「ほとんどインド各地、特にベンガル地方では大勢がこっそりとこの種の修行を行って、ヴァマチャラ・タントラの権力を引用しては正当化している。こうしたタントラを止めて、少年たちにおパニシャッドやギターなどの聖典を教えるのが最善だ」と論じている。

欧米から帰国したスワミ・ヴィヴェーカーナンダは、シヨババザールにあるラーダーカーンタ・デーヴァ寺院で、深遠なヴェーダーンタの教えを伝える講義を行った。このなかで、女性と行う修行を以下のように非難している。

「この地方の命を奪っているこの穢^{けが}らわしいヴァマチャラを止めなさい。皆さんはインドの他の地方

を見たことはありません。誇り高きベンガルの文化も、ヴァマチャラがこれほど浸透しているのを知るなら、極めて恥ずべき社会と見なさずにはいられません。ヴァマチャラ派がベンガルの社会を台無しにしているのです。日中、人前に現れては声高に善行アチヤラを説く人々が、夜ともなると最もおぞましい放蕩ほうとうに耽かつているのです。こうした行為は、最低の本に裏付けられたものです。あなた方ベンガル人はご存知でしょう。ベンガル人の聖典は、ヴァマチャラ・タントラなのです。大量に出版されて、子供達に聖典を教えるどころか、彼らの心に毒を盛っているのです。カルカッタの父親たちよ、こうしたヴァマチャラ・タントラのようなひどいものが翻訳されて出回っていることを、恥ずかしいとは思わないのですか？ こうした本を手渡された息子、娘たちの心に毒が盛られることを、そしてこんなものがヒンドウの聖典であると思つて育つことを恥ずかしいとは思わないのですか？ 恥じているのなら、そんな本を子供たちから奪い取つて、代わりにシャーストラ（真の聖典）、ヴェーダ、ギーター、ウパニシャッドなどを読ませるべきなのです」（シヨババザールにおけるカルカッタ講演の応答）

一八八六年、病床に伏せておられたコシポールの別荘で、聖ラーマクリシュナはナレンドラを呼んでおっしゃった。「我が子よ、ここでは誰も酒を飲んではいけないよ。宗教の名において酒を飲むのはよくない。そんなことをする場所では、何一つ良いことが為されないのを見てきたよ」

（訳註4） ラーター・タントラ——女性と共に行うヴィシュヌ派のタントラ修行。

（訳註5） ヴアマチャラ・タントラ——女性と共に行うシャクティ派のタントラ修行。

聖ラーマクリシュナ、スワミ・ヴィヴェーカーナンダと神アツァターラの化身の教義

聖ラーマクリシュナは南神寺院ドゥッキネーシヨルでバブラムなどの信者たちと坐っておられた。一八八五年三月七日、時間は午後三時か四時ころ。

信者たちは、タクルルの足を手でさすって奉仕セツァをさせてもらっている。信者たちに向かって笑いなから、「これ（足さすり）は、とてもいろんな意味があるんだよ」とおっしゃった。

それから、ご自分の胸に手を当ててこうおっしゃる——「もしこの中に何かがあるとしたら、（足をさすった人の）無智と無明をいっぺんに吹き飛ばしてくれるよ」

急に、聖ラーマクリシュナはまじめな表情になられて信者たちにおっしゃった。何か秘密の話をなさるご様子だ。「——ここには他人は誰もいないね。秘密の話をするよ。この間見たんだよ——サッチダーナンダがこの鞘さや（肉体）から抜けて、外に出てこう言った。『わたしは、あらゆる時代に化身する！』と。完全な顕現あはわれだとわかったよ。それが、サットヴァ性の栄光あからとして顕現あはわれしているんだ」

信者たちは驚いて、ものも言えないままに耳を傾けていた。ギーターのなかでの聖クリシュナの偉大な言葉を思い出した者もいた。

宗教グルマが正しく実践されなくなった時

反宗教的な風潮が世にはびこった時

バラタの子孫 アルジュナよ
わたくしは何時何処へでも現われる

正信正行の人々を助け

異端邪信のともがらを打ち倒し

正法をふたたび世に興すために

わたくしはどの時代にも降臨する

——ギター 4・7・8 ——

一八八五年九月一日、ジャンマシユタミー——クリシュナの聖誕祭の日。ナレンドラたち信者が次々と南神村ドブキネシヨルに集まつてきた。ギリシユ・ゴーシユが一、二の友人を伴つて、馬車に乗つてやつてきた。彼はオイオイ泣きながら部屋に入つてきた。聖ラーマクリシュナはやさしく彼の背中を叩いておやりになつた。

ギリシユは頭をあげて、合掌してこう言つた。——「あなたこそ、全きブラフマンです！ もしそうでないというなら、すべてのものは全部まちがいです！ ほんとうに、ほんとうに、口惜しいなあ！ あなたの世話ができなかつたとはねえ！ 至聖よ、お恵みを垂れ給え。一年間あなたにお仕えしていいですか？」

何度も、何度も、彼（タクール）を神として崇める讃詞を口にするので、タクールがおっしゃつた。

聖ラーマクリシュナ「チツ、そんなこと言つてはだめだ。バクトボト、ナ、チャ、クリシュナボト『私は（クリシュナの）信者であつて、クリシュナ自身ではない』自分のグルは至聖だとか、お前が思つてゐることはいいことだが、でもそれを口に出して言つてはいけない」

ギリシユは、再びタクールに祈りの言葉を奉つた——「至聖よ、清浄さを我に与え給え。これから先、罪の思いがカケラなりともわが心に浮びませぬように——」

聖ラーマクリシュナ「お前はもう、清浄だよ。お前の信念の強さ、信仰の強さ！」

一八八五年三月一日、ドラ・ヤートラ祭の日にナレンドラはじめ信者たちがやって来ていた。間もなくナレンドラに出家僧の教えをお示し下さつた——「ババ、女と金を捨てなけりやいけないよ。神だけが永遠の実在で、ほかはみな、その場かぎりのはかないものだよ」言つてゐるうちに、奥から強い靈的恍惚感が湧き上がつてこられたご様子だ。あの慈悲にみちたやさしい目つきでナレンドラを見ながら、彼に靈的恍惚感に溢れて歌をうたい出された——

語るも恐ろし　語らぬも恐ろし

宝とも思ふ君を　われ失いたくなし

わが心は君のもの　君にすべてを与えむ

危なくも苦しきこの世の海を

渡して彼の岸に到る真言を——

聖ラーマクリシュナは、ナレンドラがご自分のところから離れていくのではないかと恐れておられるようにみえた。ナレンドラは世俗の人になるのだろうか。

「私が授けたマントラが、お前にとつて唯一のマントラだ。すべてを捨てて、そしてあの御方にすべてを委ねる——理想の人生のための最高のマントラだ」

ナレンドラは目に涙をうかべて、タクールを見つめている。

同じ日に、師はナレンドラにお尋ねになった。「ギリシユ・ゴーシユが言っていること、お前も賛成しているのかい？」

ナレンドラ「私は何も言っておりません。あのかたが、あなたはアヴァターラだと信じておられるのです。私はそれについて、何とも申しませんでした」

聖ラーマクリシュナ「でも、あの人はほんとにそう信じきっているね！ わかるだろう！」

数日後、タクールは神の化身についてナレンドラと話された。「私を神の化身だという者もいるが、お前、どう思う？」

ナレンドラが答えた。「他の人が考えていることについては、何にも言いませんよ。自分が理解した時、自分が信じた時にだけ話しましょう」

コシポールの別荘で、タクールは流動食さえも喉を通らなかつた。そばに坐っていたナレンドラは、「師がこの苦しみの只中にあつても『私は神の化身だ』とおっしゃるなら、その言葉を信じよう」と思つた。そのとたん師は、「ラーマだつた御方、クリシュナだつた御方が、ラーマクリシュナの姿をとつ

て生まれ変わった——信者のためにね」とおっしゃったのだった。これを聞いたナレンドラは言葉を失った。

タクルルがご自分の住処へ帰られた後、ナレンドラは出家僧サンニヤレンとなつて、長期の苦行に打ち込んだ。するとタクルルが語っていた化身についての偉大な言葉が、さらに一層深く心に刻まれた。彼は国の内外でこの真理をより明確に教えるようになった。

アメリカにいたスワミジは、ナーラダの『バクティ・ストトラ』などに基づいて『バクティ・ヨーガ』を英語で記した。ここでも彼は、「神の化身は人々に触れるだけで、靈意識を目覚めさせることができる」と記している。悪人さえもが、そのひと触れによつて偉大な聖者になるのだ。

たとえ極悪非道の行いがあつても

専心ひたすらわたしを愛し、わたしに仕えるならば

彼は聖なる人である——なぜならば

根本の決定が正しいからだ —— ギター 9・30 ——

神ご自身が化身となつて現れて下さるのだ。神を覚さとりたいのならば、化身の中に神を見るだろう。化身を崇あがめずにはいられないのだ。

「通常の人々よりはるかに崇高な魂すうこうは、世における別格の師であり、神イーシュワラの化身アヴァタールなのだ。彼らは触

れるだけで、あるいは望むだけで靈性を伝授することができる。墮落した最低の者でさえも意のままに、瞬時にして聖者になることができる。師のなかの師であり、人の姿を取った神の最高の現れなのだ。彼らを通してのみ、我々は神を見ることができ、彼らを崇めずにはいられないのだ。そして実に彼らは、我々が崇めるべき唯一の人々なのだ」（バクティ・ヨーガ）

さらには、以下のようにも述べている。「我々が人間の肉体にありながら神を崇める限りは、神の化身を崇めるしかないのだ。どんなに偉そうなことを言ってみても、人間としての神しか思うことはできないからだ。わずかばかりの理解でもって神の眞の姿を語ろうとも、何の価値も持たない。ただの泡くずに過ぎないのだ」

「我々は人間である以上、神を、人の中で、人として礼拝せねばならないのです。いかに論じてみても、いかに頑張ってみても、人としての神しか思うことができないのです。神について、また世の中のあらゆることに関して、素晴らしい知的な講義を行えるかも知れません。また立派な合理主義者となつて、神が人の姿をとつて——化身として現れるなどと言う話は全くもってバカらしいことだと証明するかも知れません。しかし、現実的な常識でちよつと考えてみましょう。この手の立派な知性の背後に何かがあるのか？ それはゼロ！ 何もありません。ただの泡くずに過ぎないのです。神の化身を礼拝することに反対する立派な知性的な講義を耳にすることがあれば、その人をつかまえて、神をどのようなものと理解しているのか尋ねてみることで、全知全能や遍在などの文字、その字面の奥に隠されているものをどれだけ理解しているのかを——。どんなに言葉を並べてみたところ

で、実のところ、何もわかっていないのです。人間としての生まれながらの性質に影響されずに（神の）概念を築くことは出来ないのです。この点においては、知的な人も、本を一冊も読んだことのない巷の人も、何ら変わりはないのです。」（バクティ・ヨーガ）

一八九九年、スワミジーは再びアメリカに渡った。一九〇〇年にはカルフォルニア州ロサンゼルスで、メッセジャーとしてのキリストについての講演を行っている。ここでは、化身（神の子）の中に神を見るべきことに触れている。我々の中にもおられる神が化身の中により強く現れていること、光の振動はどこにも存在するが、大きな光が灯されると暗闇はすべて消えてしまうことを語った。

「これは同じメッセンジャー（キリスト）によって言われたことです。『神を見た者はいないが、彼らは神の子を見た』これは真実です。そして神の子のなかに神を見なければ、どこに神を見るのですか？ 皆さんも私も、そして我々のなかの最も貧しき者、最も卑しき者でさえも神を具現し、映し出しているのです。光の振動は遍在しますが、光を見るにはランプに火を灯さねばなりません。宇宙に遍在する神は、預言者、神人、化身、神の権化という偉大な地上のランプに映し出されない限り、見ることはできないのです」（メッセンジャーなるキリスト）

スワミジーはさらに語っている。「あらん限りの想像力をもって神の本性を想像しようとも、想像された神は神の化身にはまったく及びもしないのです。神なる人を崇めることに、何の問題があるのでしょうか？ まったくありませんか。それだけではなく、神を礼拝したいのなら、神の化身を礼拝するしかないのです。人間に過ぎない我々には、人間の姿をした神を崇めるしかないのです」

「こうした偉大な光のメッセンジャーを取り上げて、その人格をあなたが作り出した最高の理想神と比べてみて下さい。そうすればあなたの作り出した神が理想に及ばないこと、預言者の人格があなたの概念を凌ぐことに気づくでしょう。実際に悟った神の化身が我々の目前に示してくれる手本、それに優る神の理想を我々が思いつくことはできないのです。では、こうした人々を神として礼拝するのは間違っているのでしょうか？ こうした神人の足元にひれ伏し、世に唯一の神なる人として崇めるのは罪なのでしょうか？ 我々が抱く神の概念よりも實際格段に高い存在のなら、崇めて何の害があるでしょうか？ 害があるところか、これこそが唯一可能な肯定的礼拝なのです」（メッセンジャーなるキリスト）

〔化身のしるし（イエス・キリスト）〕

神の化身は何を示すために生まれてくるのか？ タクール、聖ラーマクリシュナは、ナレンドラにおっしゃった。「パパ、女と金を捨てなけりゃいけないよ。神だけが永遠の実在で、ほかはみな、その場かぎりのはかないものだよ」スワミジもまた、アメリカ人に教えている。

「キリストの生涯に見られるのが、この命ならぬ、より高尚なるもの！ 』という第一の標語です。この世とそこにあるすべてのものを信じてはなりません！ 無常にして消え去るものなのですから——」
イエスは女と金を放棄していた。魂が男でも女でもないことを知っていた。神の化身は、富、名声、快楽、感覚を満たすことを求めない。私や私のものに意味がなくなるのだ。私が為しているん

だ。この家は私のものだ。これは私の家族だ」という感覚は、すべて無知から生まれる。

「私たちにはまだ、*私*と*私*のもの」という愛着があります。土地、金、富を欲しがります。哀しいことではありませんか。悔い改めましょう。人類の偉大な師に恥をかかせぬことです。イエスは、家庭に縛られてはいませんでした。そのイエスが肉体的な考えを持つていたと思いますか？ この光の塊が、人ならぬ神が、動物のような人々の兄弟となるために、地上に降誕したと思いますか？ としてイエスがあらゆる類の説法、卑しい話にさえも及んだ、と今なお誤解しているのです。イエスは肉体的な存在ではなく、魂でした。謂わば肉体にありながらも、人類の善のためにひたすら働く魂そのものでした。肉体を纏った理由はそれだけでした。と言うか、そうでさえなかったのです！ 魂には男も女もありません。肉体を離れた魂は、動物とも肉体とも関係しないのです。この理想は高いかも知れません。我々には遥か届かぬことです。しかし嘆くことはありません。理想なのですから——。それを告白しましょう。まだそこに至らなくとも……」（メッセンジャーなるキリスト）

彼はまた、アメリカ人に言っている。「化身はさらに何と申すでしょうか？ 『あなた方には、私は見えても神は見えないのか？ *彼*と*私*は一つだ」と。ハートにある浄らかな心によって、神は知られるのだ。

「『あなた方は私を見たのに、*父*を見てはいないのか？ *私*と*父*は一つだ。天の王国はあなた方のなかにある』^(註6)十分に浄らかであれば、自分と父が一つであることを、ハートの内奥にも見るでしょう。これがナザレのイエスが語ったことなのです」（メッセンジャーなるキリスト）

この講演の別の箇所ですワミジューは言った。「信仰を確立するために、化身はいつの世にも肉体を纏^{まと}つて現れます。様々な時代、様々な場所に、キリストのように現れるのです。彼らが望むならば我々の罪は許され、解放されるのです(身代わりの贖^{あがな}い)。常に彼らを崇^{あが}めんことを——」

「それ故、ナザレのイエスのみならず、彼(イエス)よりも前に現れた方々、そしてその後現れた偉大な方々、そして将来来られるであろう偉大な方々、すべての方々の内に神を見出しましょう。我々の礼拝は何ら制約はなく自由です。偉大な方々はみな、同じ無限なる神の現れなのです。純粹にして無私なる方々です。我々貧しき人類のために奮闘し、自らの人生を捨てた人たちなのです。我々一人一人のために、そして今後来たるべき人々のために、身代わりとなつて贖^{あがな}いを為してくださいる方々なのです」(メッセセンジャーなるキリスト)

〔ジュニヤーナ・ヨーガとスワミ・ヴィヴェーカーナンダ〕

スワミジューは、人々がヴェーダーンタについて語り親しむことを奨励したが、同時にまた、こうした議論に伴う危険を指摘してもいる。一八八四年、タクールがターンタニヤで学者シャシャダルとお

(訳註6) わたしを見た者は、父を見たのだ(ヨハネ福音書 14・9)

わたしと父とは一つである。(ヨハネ福音書 10・30)

神の国はあなたがたの間にあるのだ。(ルカ福音書 17・21)

話しされた折、ナレンドラは多くの信者も居合わせた。

タクルルがおっしゃった。「現代は智識ジニヤナのヨーガはとても難しい。先ず第一に、人は食物なしはこの世に生存できない。それに寿命が短い。その上、肉體意識がどうしても無くならない。肉體意識が無くならない限りは、完全な智識は得られないんだからね。智者はこう言う——『私はあのブラフマンだ。私は肉體ではない。私は、飢え、渴き、病氣、悲しみ、誕生、死、幸福、不幸、こういったものすべてから超越している』と。もし、病氣や悲しみや幸不幸などを感じていたら、お前は智者というわけにはいかないよ。手に釘がささって血がダラダラ流れてものすごく痛いのに、それでもこう言っているんだよ——『ナニ、釘なんかささっていない。私はナンでもないよ』と。

だから、現代は信仰イマのヨーガだ。これで他の道を通るより楽に神様のところへ行ける。智識ジニヤナや行為カルマや他の道を通っても勿論、神様のところへ行けるよ。でも他の道はとても難しい道なんだよ」

さらにタクルルはおっしゃった。「残っている仕事をするときは、無執着の気持ちで為されねばならない。果報ヒクイを求めることのない無私の働きによって心が清まってくると、神様に対する愛と信仰が増してくる。神様はこうした信仰イマによって覚サトることが出来るんだ」

スワミジーも言っている。「肉體意識がある限り、ソーム（我ワはそれなり）の悟りは得難い。つまり欲望がすべてなくなると、完全な放棄がなされたときに、神との合一（サマーデー）に至るのだ。ブラフマンの智識は、サマーデーによってのみ得られる。バクティ・ヨーガは自然にして甘美な道なのだ」

「ジュニヤーナ・ヨーガは偉大で、崇高な哲学だ。そしてまことに奇妙なことに、ほとんど誰もが自分に求められるすべてが哲学によって為しうる、と確信している。しかし実際に哲学の人生を送るのは極めて難しい。人生を哲学によって導こうとすると、大きな危険に陥りがちだ。この世は二種類の人々に分けられると言えよう。一つは、身体の世話を焼くことが存在の肝心要かんしんかなめだと思っている悪魔的な人々、そしてもう一つは、身体は単に目的のための手段であり、魂を養うための道具であることを知っている信心深い人々、この二つに分かれるのだ。悪魔的な人は、自分の目的のためなら聖典から引用することもできる。かくして智識の道は、善人の行為を促すこともできるが、また悪人の行為を正当化することも少なくないようだ。これがジュニヤーナ・ヨーガの大きな危険だ。しかしバクティ・ヨーガは自然で、甘美で、優しいものだ。信仰者バクティは智ジュニヤーナ行者ヨーギー者キのように高く飛翔はしない。ゆえに大きく墜落することも、まず、ないのだ」(バクティ・ヨーガ)

〔聖ラーマクリシュナは神の化身か? — スワミジীরの信仰〕

スワミジীরは、インドの聖賢についての講義のなかで、神の化身について多くを語っている。聖ラーマ、聖クリシュナ、仏陀、ラーマヌジャ、シャンカラ大師、チャイタニヤ様と、その生涯について語った。ギーターのなかで聖クリシュナが語る言葉「善ダルマが廃すたれ、不徳アダルマが蔓延はびこる時、善人を救い、邪悪なるものを倒すために、私はいつの時代にも降臨する(ギーター 4・7〜8)」を説明している。

「美徳すたが廃すたれ、悪徳すたがはびこる時、私は生まれ出ずる。善人を守り、不徳を破壊するため、いつの世

にも私は生まれ変わる」(インドの聖賢)

さらにスワミジーは、「聖クリシュナは、ギーターにおいて宗教を調和させた」と言っている。

「すでにギーターのなかで、宗派間の不協和音が遠くから聞こえています。その只中であつて調和に導くために、主はやつて来られます。偉大なる調和の説法者、調和の最大の導師なる主クリシュナご自身がやつて来られるのです」

「聖クリシュナは、ギーターのなかでさらにおっしゃっています。『バラモン(司祭)、クシャトリア(王族・武士)は言うまでもなく、女性、ヴァイシヤ(商人)、シュードラ(労働者)たちもみなが最高の解脱に至るだろう(ギーター9・32〜33)』と」

「仏陀は、貧者の神だった——サルヴァ・プータ・スタム・アートマナン『万物のなかに自己』を見る(ギーター6・29)』神が万物に宿ることを、自らの行為によつて示したのだった。仏陀の弟子は個我なるアートマンの存在を信じなかつた。そのためシャンカラ大師が再びヴェーダの信仰を教え広めたのだった。彼の不二二元の教義に続いて、ラーマヌジャが制限不二論を説いた。さらにはチャイタニヤ様が下生して愛と信仰を教えた。シャンカラとラーマヌジャはカーストによる違いを認めしたが、チャイタニヤ様は認めなかつた。信者にとつて何のカーストがあるだろうか?」

次にスワミジーは、聖ラーマクリシュナについて語つた。——この御方(聖ラーマクリシュナ)は、シャンカラの智識の力とチャイタニヤの強烈な神への愛を併せ持つておられた。そして聖クリシュナによる信仰の調和を再び語られ、さらには貧者、虐げられた者、罪人のために、仏陀のごとく涙され

たのだった。謂わば、以前の神の化身は完全な現われではなかったが、聖ラーマクリシュナはあらゆる聖者の完全な現われであったのだ。

「ある人(シャンカラ)は偉大な知性を、またある人(チャイタニヤ)は寛大な心を持っていました。そしてこの知性と心の両方を併せ持った化身が生まれるに相応しい時が満ちたのでした。シャンカラの輝く知性と、チャイタニヤ様の広大無限な素晴らしい心を持ち合わせる一人の化身が生まれ出る機が熟したのでした。あらゆる宗派に、同じ霊、同じ神の働きを見る御方。万物の中に神を見る御方。貧者、弱者、賤民、虐げられた人々、万人のために涙する心を持った御方。インド内外での宗教対立を調和するという高潔な思想を抱く、抜きん出た知性の偉大なる御方。その御方が知性と心の普遍的宗教という驚くべき調和を生み出したのでした」

「そのような御方が生まれ、私は数年間その足下に坐るといふ幸運を得ました。機は熟し、そうした御方が降臨する必要があったのです。たいへん素晴らしいことに、その御方がやって来て生涯を送られたのが、西洋思想に溢れる都市、インドのどの他の都市よりも西洋かぶれしてヨーロッパ化された都市の近くだったことでした。その御方は無学のままそこに暮らされました。この偉大な智慧の人は自分の名前書くことさえもできませんでしたが、最も優秀な学士達が彼のうちに知識の巨人を見たのでした。この御方、大覚者ラーマクリシュナは、変わった人でした。語れば長い長い話になるので今日は触れる時間がありません。ただ言えるのは、聖ラーマクリシュナがインドの聖者の最高峰であり、今の時代にもっとも役立つ教えを説いた時の聖者である、ということです。そしてこの方の背後に働

く聖なる力に気づいて下さい。人里離れた村に、貧しい神職の息子として生まれましたが、今日ではヨーロッパ、アメリカで実際何千もの人々から礼拝を受けています。そしてまた近い将来、さらに数千もの人々から崇められるでしょう。神の計画を誰が知ることができましょう！ 兄弟の皆さん、神の摂理の御手が見えないのなら、それはあなたが盲目だから、実に生まれつきの盲目だからなのです」(インドの聖賢)

スワミジは続けた。「賢者たちがサラスワティー河の岸边で聞いたヴェエーダの神聖な言葉、かつてヒマラヤの峰々から偉大な苦行者たちの耳に響き渡った言葉、聖クリシュナ、仏陀、チャイタニヤという名前を纏い、すべてを内包する激流となって速やかに地上に降りた言葉、こうした神聖な言葉が今日、再び聞こえているのです。偉大なメッセージは、インドをはじめとして世界の隅々に短期間で届くでしょう。このメッセージは日々、新たな力を得ているようです。神聖な言葉は太古より幾たびも聞こえてきました。しかし、今日私たちが聞いているのは、それらすべてが集結されたものなのです」

「再び車輪は速さを増しています。インドから起こったさらなる振動は、近い将来、地の果てに至る定めにあります。押し寄せては日ごとに力を増すその声の響きがかつてないほどに力強いのは、それが今までのすべての集大成だからです。繰り返しますが、サラスワティー河の岸边で聖者たちに語りかけた声、父なる山々の峰々から峰へと鳴り響いた声、クリシュナ、仏陀、チャイタニヤを通じて地上に降りてきてすべてを包み込んで溢れ返らせた声、再び語っているのです。そして再び扉は開かれています」

ます。光の王国にお入りなさい。門は広く開かれていますから——」（ケートリの講演での応答）
さらにスワミジーは、自分が一度なりとも真理を語ったならば、それはすべて聖ラーマクリシュナの言葉であるり、不完全な言葉であったなら、それはすべて自分の言葉だったことを覚えていてほしいと述べている。

「私が真理の一言を語ったことがあるのなら、それはひとえにあの御方のものであり、真理ではないこと、正しくないこと、人類の為にならない多くを語っているならば、それはひとえに私のものであり、私の責任です」

かくしてスワミ・ヴィヴェーカーナンダは、インド各地で神の化身、聖ラーマクリシュナの降臨を告げた。僧院マトが建てられたあらゆる場所では、聖ラーマクリシュナの日々の礼拝が行われている。こうした場所の献灯アイラティの時間には、スワミジーが作った讃歌が楽器の美しい伴奏を伴って歌われている。スワミジーは讃歌の中で、属性を持つ御方、属性を持たない御方としての完璧ニラシヤンなる宇宙の主として、聖ラーマクリシュナに呼びかけている。そしてまた世俗の大海を渡る舵手かじりとも呼んでいる。「我々をこの世の束縛から解放するために、我々が神と合一することを助けんがために、あなたは人のお姿をとって下生されました。私がサマーデイに至ったのは、あなたの恩寵に負うものです。あなたは、女と金カネを放棄させて下さいました。おお、信者の避難場なる御方、あなたの蓮華の御足への信仰をお与えください。あなたの蓮華の御足こそ我が至宝たから。それさえ手に入れば、この世という大海は牛の蹄ひづめが掘ったぬかるみに過ぎません」

スワミ・ヴィヴェーカーナンダによる献灯讃歌^{アールラテイ}

(一) カーンダナ バヴァ・バーンダナ ジャガ・バーンダナ パーンデイ・トマール

ニールンジャナ ナラ・ループ・ダラ ニールグナ グナ・マール

『この世の束縛を解く御方

万人に讃えられし御方を崇めん

グナを超えながらも

グナを持つ神人、ああ、人の姿を取られし罪なき御方』

(二) モーチャナ アガ・ドゥーシヤナ ジャガ・ブーシヤナ シッド・ガナ・カール

ジャーナンジャナ ビマラ・ナヤナ ビーシヤネ モハ ジャール

『あらゆる罪を贖う御方

世の宝玉にして純粹意識の濃厚な顕れ

知恵の妙薬に浄められし御方の瞳は

無知の迷妄をひと目で打ち砕く』

(三) バーシユヴァラ バヴァ・サーガラ チラ・ウーンマダ プレーマ・パタール

バークタールジャナ ユガラ・チャラナ ターラナ バヴァ・パール

『光みなぎる崇高な靈性の大海』

恍惚の愛の波を打ち寄せる御方

信仰の賜物なるその淨き御足こそ

輪廻サンサーラの大海を渡す舟』

(四) ジュリームビタ ユガ・イーシュワラ ジャガ・イーシュワラ ヨーガ・サハーイ

ニローダナ サマヒタ・マナ ニラキ タヴァ クリパーイ

『現代の化身として現れた宇宙の主』

靈性の努力に報いられる御方

御心が常に超越のサマーデイに定まりしことを

私は恩寵によりて確しぶと見て取る』

(五) バーンジャナ ドウーカ・ガンジャナ カルナー・ガナ カールマ カトール

プラーナルパナ ジャガタ・タラナ クリーンタナ カリ・ドール

『諸人もろびとの果てしない悲しみを碎かれる御方』

ああ、慈悲の塊 ああ、偉大なる働き手

人類の贖罪の為、人生を愛の捧げ物とされし御方
そのお力は、カーリーの暗黒時代の束縛を打ち砕く』

(六) ヴァーンチャナ カマ・カインチャナ アテイ・ニンデイタ イーンドウリヤ・ラーグ

タヤーギーシユワラ ヘエー ナラ・ヴァアラ デハ パデ アヌラーグ

『感覚の誘惑を完全に撥ね付け

情欲と欲望を克服されし御方

祝福された御足への揺るぎない愛を授け給え

すべての放棄者の主、人類の最も高貴なる御方』

(七) ニールバヤ ガタ・サムシヤヤ ドウリダ・ニーシユチャヤ マーナサ・ヴァーン

ニーシユカーラナ バカタ・シヤラナ タヤジ ジャタイ・クラ・マーン

『すべての恐れを超え、すべての疑いをぬぐい

その心は確固たる決意にあられる御方

生まれと人種の誇りを知らず

普遍なる愛ゆえ、求める信者のすべてに避難場を与えられる御方』

(八) サーンパダ タヴァ シュリーパダ バヴァ ゴーシュパダ・ヴァーリ・ジャターイ

ブレーマールパナ サマ・ダラシヤナ ジャガ・ジャナ ドウカ ジャーイ

『ああ、愛の捧げ物なる御方よ ああ、平等の権化なる御方よ

その聖なる御足をハートに抱く者には

輪廻サンサーラの大海も子牛の蹄ひづめが掘った水たまりに過ぎぬ

その悲しみには羽が生えて飛び去らん』

(九) ナモー ナモー プラブ バークヤ・マナー・テイタ

マノ・パチャナイ・カーダール

ジョーテイラ・ジョーテイ ウジャラ リデイ・カンダラ

トウミ タマ バンジャナ ハー(プラブ)

『主なる御方に幾たびも額めかずかん

言葉と心を超えながら、その双方の礎いしずえであられる主よ

ハートの内奥に永遠に輝く光の中の光

そこにある無知の暗闇を破壊し給え

おお、主よ、闇を碎き給え』

(十) デ、デ、デ、ランガ ランガ バンガ バージェー アンガ サンガ ムリダンガ

ガイチュエ チャンダ バカタ・プリンダ アーラテイ トマール

ジャヤ ジャヤ アーラテイ トマール

ハラ ハラ アーラテイ トマール

シヴァ シヴァ アーラテイ トマール

『デ、デ、デと響く太鼓のリズムに合わせ

あなたの信者はあなたへの献灯アールラテイを捧げん

ジャヤ、ジャヤ、献灯アールラテイを捧げん

ハラ、ハラ、献灯アールラテイを捧げん

シヴァ、シヴァ、献灯アールラテイを捧げん』

(十二) カンダナ バヴァ・バーンダナ ジャガ・バーンダナ バーンデイ トマール

ジャイ シュリー グル マハラ・ジ キ ジャーイ

『この世の束縛を解く御方

万人に讃たたえられし御方を崇あがめん

偉大なる師に勝利あれ』

(註——ベンガル語原典では八番までの歌詞しか記載されていませんが献灯アールラテイの時に歌われている全文を掲載しました)

〔ラーマであつた御方、クリシュナであつた御方が今、ラーマクリシュナとして……〕

西洋の旅からカルカッタに戻つたスワミジは、コシポールの別荘で聖ラーマクリシュナから聞いていた素晴らしい言葉を思い出した。そしてその確信の言葉に思いを馳せながら、ベルール僧院マドで讃歌を作詞したのだつた。「卑しき者、貧しき者、賤民の友にしてジャンキー（シーター）に愛されし御方、知識と信仰の化身、聖ラーマ、そして聖クリシュナとしてクルクシエートラでギターおんの厳かにして甘美な調べを奏でられた御方。その御方が、今や名高き聖ラーマクリシュナとして姿を現されたのだ。

オーム ナモー バガヴァター ラーマクリシュナーヤ

(一) アーチャンダーラー・プラテイハタラヨー ヤツシャヤー プレーマ・プラヴァアホー

ローカーテイートー・ピヤハハ ナ ジャホウ ローカー・カリヤーナ・マールガン

トライローキエー・ピヤプラティマ・マヒマー ジャーナキー・プラーナ・バンドオ

バクチャー・ギヤーナン ヴリタヴァラヴァプフー シータヤー ヨー ヒー ラーマハ

『ほとばしる愛の流れで賤民チヤンダーラをも包み込みし聖ラーマなる御方

おお、世を超えておられながら、絶えず世への善行を為されし御方

三界に比肩する者なき名声を博して、シーターに愛されし御方

至高の知恵を宿すその身を、甘美な親愛の権化なるシーターいだけに抱かれし御方』

(二) スタブデイー・クリテヤー プララヤ・カリタム ヴァーハヴォッタアン マハーンタン

ヒトヴァアー ラートリム プラクリティ・サハジャーム アンダアー・ターミシユラー・ミシユラム

ギータム シヤーンタム マドウラマビ ヤハ シンハ・ナーダム ジャガルジャ

ソーヤム ジャーター プラティタ・プルシヨ ラーマクリシユナスツヴィダーニーン

『クルクシエートラの大戦を鎮めし御方

(アルジュナの)性質から生まれし無知の闇夜を取り除かれし御方

そして心に平安を呼ぶ甘美なるギーターを、獅子のごとく叫ばれし御方

その名高き魂が今、ラーマクリシユナとしてお生まれになった』

そしてベルール僧院^{マト}の他、カーシー(バラナシ)、マドラス、ダツカなどの僧院^{マト}で夕拝の時に歌われるもう一つの讃歌がある。

この讃歌の中でスワミジは、以下のように歌っている。

「おお、低き者の友よ、あなたは(三つの)属性^{ブナ}を有し、そしてなおそのサットヴァ、ラジャス、タマスの三つのグナを超えておられる。昼夜その御足を拝めない私は、あなたのもとに避難します。唇で御名を唱え、靈性の知恵を語っても、何一つ覚ってはいません。それゆえあなたの上に避難するのです。あなたの蓮華の御足を瞑想することで、死を克服します。おお、卑しき者の友よ！ この世にあって、あなただけが渴望するに相応^{ふさわ}しい御方。あなたのもとに避難します。タヴァメーヴァ シャ

ラナム ママ デイーナ・バンドウ (サンスクリット)」

(二) オーム フリーム リターム タヴァチャロー グナジツト グネーデヤハー

ナークタム デイヴァム シヤカルナム タヴァ パーダ パッドマム

モーハン・カシヤム バフ・クルタム ナ バジエー ヤトーハーム

タスマツト タヴァメーヴァ シヤラナム ママ デイーナ・バンドウ

『聖なる響き、オーム・フリームが示す至高の存在なる御方

グナの支配を超えた不変の真理にして

グナが讃える栄光であられる御方

迷妄を砕くその御足の礼拝を

憧憬の念と確固たる決意をもて為すことを

私は昼夜怠っている

それゆえあなたこそ我が唯一の避難場

おお、卑しき者、彷徨^{さまよ}える者の友なる御方』

(二) バクテイル バガースチャ バジャナム バヴァ・ペーダ・カーリー

ガツチャーンテヤラム スヴィプラム ガマナーヤ タツトヴァム

ヴァクトロード・ドウリトービ　リダエ　ナ　チャ　パーティー　キーンチーット
タスマット　タヴァメーヴァ　シヤラナム　ママ　ディーナ・バンドウ

『世のしがらみを断つ』

信仰、求道心、礼拝が

至高の真理へと飛翔させる

なのに、これを語る端から

私のハートは思い起こすことすらできない

それゆえあなたこそ我が唯一の避難場

おお、卑しき者、彷徨^{さまよ}える者の友なる御方』

(三)

テージヤス・タラーンテイ　タラサ　トワイ　トゥリープタ・トゥリーシユナ

ラーゲー　クリテ　リタパター　トワイ　ラーマクリシユネー

マールテヤ・ムリータム　タヴァ　パダム　マラーノールミ　ナーシャーム

タスマット　タヴァメーヴァ　シヤラナム　ママ　ディーナ・バンドウ

『おお、真理と正義の使徒なるラーマクリシユナ

あらゆる願望の成就をあなたの内に見て

あなたへの愛情を抱く者は

やがてハートの情熱の炎に打ち克つ

その御名は信者たちにとってまさに不死の妙薬

死の波を誠に打ち砕く御方

それゆえあなたこそ我が唯一の避難場

おお、卑しき者、彷徨^{さまよ}える者の友なる御方』

(四)

クリテヤーム カローテイ カルシヤム クハカーンタ・カーリー

シユナンタン シヴァム スヴィムラム タヴァ ナーマ ナータ

ヤースマードハム トウワシヤラノー ジャガデーカゲームミヤ

タスマット タヴァメーヴァ シヤラナム ママ デイーナ・バンドウ

『主よ、シユナ^クで終わる聖なる浄めの御名

すべてにおける迷妄を壊し

罪人を聖者と成せる御方

私にとってあなたの他に避難場はありません

おお、すべての世界が目指す御方

それゆえあなたこそ我が唯一の避難場

おお、卑しき者、彷徨^{さまよ}える者の友なる御方』

献灯を終えたのち、スワミジは聖ラーマクリシュナにいかに敬意を示すかを教えた。ここでは、タクルがあらゆる化身のなかで最高の現れだとしている。

(五) オーム スターバカーヤ チャ ダルマシヤヤ サルヴァ・ダールマ・スワルーピネー

アヴァターラ・ヴァリスターヤー ラーマクリシュナーヤ テー ナマハ

『おお、ラーマクリシュナ、普遍の信仰を築かれし御方

世界のあらゆる宗教の権化なる御方

聖なる化身の最も優れて高貴なる御方

オーム、ラーマクリシュナに帰依いたします』